



1 話 処女喪失

……まさか、勇者としての人生の次に待っていたのが、女王の娘……「TS 王女」とは。女王に、童貞ではなく、「処女」を奪われるなんて、誰が思うだろう。昨日まで、俺は、魔王を倒すために生まれて、生きてきた、勇者……男だったのに——

ティアリーノ女王の手が、俺の「胸」に触れ、大きさを確かめるように、揉む。

「あっ……」

自身の喉から漏れ出る声は、知らない「女の声」。
少なくとも、いつもの「俺の声」ではない。

ついさっきまで俺の胸部にあったのは、まさに分厚い筋肉に覆われた胸板だった。
それが今は無くなり、代わりにふたつの丸い山……女性にしかないはずの胸がある。
それを女王の手が揉んでいる。

俺は怖くて下を確認出来ない。
いつも下半身で随時存在を主張する男性器の、「おなじみの重み」が、ない……

ティアリーノ女王がニコリと優しく笑う。
セレス王家特有の紫水晶のような瞳で、俺を見つめる。
俺も、同じ色の瞳で、戸惑いながら見返す。

ティアリーノ女王の手が俺の「割れ目」に触れる。
ピチャ……という濡れた音が「そこ」から発せられた。

ティアリーノ女王が、黒のドレスを脱いで、下着姿になる。
大人の女といった感じの、黒のレースのブラジャーと、同じく黒のレースの紐パンティ。
控え目な美乳がブラジャー越しに自己主張しており、ウエストもくびれていて……

「普通」なら理性を失い、この目の前の女性に襲いかかって、めちゃくちゃにセックスするんだろう。
パンティをはぎ取り、フル勃起したペニスを、割れ目に無理やりにでもねじこんで、奥を突きまくり、中に精子を出してやるまでとまらないだろう。

しかし……俺は、「普通」の状態ではなくなっている。
生まれた時からあった肝心のペニスが、ないのだから……
目の前の女性をどうにかしたくても出来ないのだ……

ティアリーノ女王が自ら、パンティの紐をほどき、割れ目をあらわにする。
割れ目どころか、自分で指で広げて、見せつけるように、女性の中の部分を……
その部分はしっかりと濡れていて……

女王が「割れ目」を、俺の「割れ目」にピタッと合わせる。

「うああああ！！！」

俺の喉から勝手に高い声が出る。
女王は俺の体を押さえ、割れ目同士をズリズリと合わせてくる。
合わさったそこから、信じられないような快感が股から全身に広がり……

「ん、くっ、あ、あああ……」

俺の割れ目をこするティアリーノ女王の割れ目が、どんどん膨らんでいる気がする。
と思ったら、女王が体を離し…

「んああああああ！！！」

俺は悲鳴のような声で叫んだ。
視界が白くなりかける。

俺の割れ目に、大きくて固くて太いモノが、入ってくる！

「ひiiiiiiiiiiii！！！！！！」

その大きくて固くて太いモノは、俺の体を内側から引き裂くように侵入して……

——ブツッ。

体の奥で、何かが破れる感覚が走った。
まるで、自分の中の「男」が断ち切られる音のように！

「用済み勇者」からの「TS 王女」の人生は、処女喪失で幕を開ける。

この物語は、女性同士のめくるめく愛と快樂……

俺……いや、「私」は、女性として花開き、名実ともに「ティアリーノ・セレス女王国の王女」となる——。

2 話 用済み勇者、確定

時を遡ること、3 時間前…

俺は、門番の兵士と軽い挨拶を交わしながら、王城の門を潜っていた。
女王に呼ばれたので、王城の謁見室に向かっている……

俺の名前はティルバート、20 歳。
1000 年前に魔王を倒した伝説の勇者、その子孫だ。

身長 185 センチ、鍛え過ぎて逞しい体格は、自他共に認める「ゴリラ」。
日に焼けた黒い肌は、皮膚と言うか、鋼。
髪は黒だが、鍛錬の邪魔になるのでいつもセルフバリカンでザクザク刈っている。

服装はいつも着古したシャツに色褪せた長ズボン。
ファッションには全く興味が無い……と言うか、分からない……

女性について考えることもない、鍛錬中心の生活だ。
そもそも壊滅的にモテない……
まあ、俺の見た目や気の利かなさでは当たり前だけど……

——そんな俺の靴音が、石床に響く。

そして女王の謁見室の、重厚な鉄の扉の前に着いた。
俺は扉を開ける……



「よく来たな、ティルバート。各地での魔物討伐と、魔王戦に向けての鍛錬、いつもご苦労。」

落ち着いた大人の女性然とした中低音の声が響いた。

「……どうも。」

俺は短く返しただけ、敬語も抜き。

本来なら不敬罪かもしれないが、いつも特に不問。

相手は、ティアリーノ・セレス。

俺にとっては、おなじみすぎるほどの女王陛下。

このティアリーノ・セレスという名は、王国の名前そのまま。

初代から代々、女王と王位継承権のある王女は全員この名前を継いでいて、今俺の目の前にいるのが20代目。

女王と俺は血縁もある。

親戚付き合いの延長で、物心つく前から世話になっていた。

10才で母を亡くした俺にとって、彼女は……どこか母親代わりのような存在だった。

「ところで、俺が今日呼ばれたのは……？」

用件を聞いてみても、女王は優雅に微笑むだけだった。

銀髪に紫の瞳……セレス王家の血を引く証。

その美女は、まさに“女王”という名にふさわしい、スリとしたモデル体型だった。

実年齢は 50 才だが、25 才前後の外見を、エイジング魔法で保っている。

魔法の天才で、初代女王の再来とまで言われた存在だ。

「ティルバート、いつ見てもお前は素晴らしい。まさに男の中の男。勇者然とした鋼の肉体……」

「その話、あとどのくらい続くんか？」

思わず言葉を遮ってしまう。

……この女王が、わざわざ俺を呼びつけるなんて、この時点で、何かある。

武器も報酬も、いつもいきなり郵送で箱が勝手に届く……

多少親しくても、特に馴れ合いはしていない……そんな関係なのだ。

それなのに、今日は「呼ばれた」。

……嫌な予感しかない。

「では本題に入ろうか……重要なことが、ふたつあるのだ。」

この時には、女王は真顔だった。

「まずひとつ目。今朝、魔王が討伐された。」

「……は？」

耳を疑った。

俺が倒す気満々だった魔王が、今朝討伐された？

脳が理解を拒否した。

3 話 異世界転生最強チート勇者

「……今朝、空から落ちてきた男が、魔王を一撃で倒したそうだ。」

静かな声で、女王がそう言った。

「……は？」

「その者はすぐに空へ消えていった。おそらく、異世界からの一瞬の来訪者だろう。
百年に一度、天から英雄が現れるという伝承があったが、まさか本当だったとはな。」

女王は淡々と語るが、俺の中では何かが崩れていった。

「魔王がもう居ない以上、お前の勇者としての役目は、終わりだ。」

その一言で、心臓が氷のように冷たくなる。
音もなく膝から崩れる。
これまでの人生が、音を立てて消えていく気がした。

鍛錬、魔物との戦い、ただ魔王を倒すためだけに、生まれて、生きてきた。
青春も、友情も、恋も、俺にはなかった。
魔王討伐という最高の瞬間のためと言い聞かせて、やりたくもない勇者をやっていたのに……

「……納得しろと言われても……」

気付けば、声が出ていた。

「どこの誰とも知らない転生チート野郎が、ポツと現れて、何の苦労もせず俺の存在価値を奪っていったなんて！」

胸の奥から、怒りと悔しさがこみ上げてくる。
女王に当たっても仕方ないけど……

「うんうん、そうだよな、よしよし、可哀想に…」

女王がそっと、膝から崩れて立てない俺の頭に手を置いた。

いつも通りの、優しい手。

母親のように俺を慰めるその手が、今はただ、痛かった。

「……話は終わってないぞ、これが 1 番の本題だ。」

女王は真剣な眼差しで言う。

「お前に、我が TS 女王国の王女としての道を歩んでほしい。

私の養子になり、次代の女王となってくれ。」

「……は？」

今度こそ本気で聞き間違えたかと思った。

「……お、俺が……王女？」

馬鹿じゃないのか、この人は。

この 185 センチの筋肉ゴリラを捕まえて、王女？

「……私は、独身で、子が居ない。

見た目こそ若く保ってはいるが、お前も知っての通り、私は 50 才。

生理は終わっており、今から出産は不可能な身体だ。

誰かを跡継ぎにするなら……勇者の血を引き、今まで頑張ってくれたお前しか居ない。」

「俺は男だから、無理だろう……」

「……だから、変わってもらう。」

女王がそう言った瞬間――

キィィィン……

耳をつんざく音と共に、床が光りだす。

紫の魔法陣が、俺の足元に出現していた。

「なっ……！？これ、いつの間に！？」

「これは、TS 女王国の女王が一生に一度しか使えない禁術、女体化魔法。
王女にふさわしい精神の持ち主を、それにふさわしい肉体へと創り変えるのだ。
正式名称は、《王女化転生：プリンセス・リジェネレーション》！」

「そんな、何を、やめろ……うわああああああああ！！！！」

ビリビリビリビリ！！

電撃のような痛みが全身を走る。
骨が、肉が、内側から破壊されていく——！

体が……壊れている！？
俺は、女王に、殺されようとしてるのか！？なんで、どうして！

「……耐えてくれ。誰より強かったお前なら、きっと超えられる。
この国の未来を託せるのは、お前だけなのだ……！」

涙を浮かべながら、女王はそう言った。

でも、俺にはもう、聞こえなかった。
世界が白く染まっていき、俺は叫ぶことしか出来ない……

……そして、どのくらい経っただろう。
俺の叫びが途切れたその時。
全身の痛みは、まるで嘘みたいに、ふっと消えた。

4 話 TS 王女ティアリーノ、誕生



「おお、これはこれは、あのマッショゴリラ勇者が、こんな人形のような華奢な美女になるとは。」

……人形のような華奢な美女？

「元々の面影は、紫の瞳だけにとどまったな。黒髪は銀髪に変わり、顔立ちも私に似ている。」

銀色の髪が床に散り、ステンドグラスに映る自分の姿は……確かに、俺ではなく、華奢な女性だった。

「そのドレス、よく似合っている。下着はあとでたくさん用意してやるから。」

その言葉に、俺は恐る恐る、自分の身体を意識した。

長い銀髪、白い肌、谷間の主張が激しい大きな丸い胸。

そして、股がスースーしている！

あれだけ随時存在を主張してズッシリ重かった、男の象徴の気配が、ない！

俺は自然に、両手で胸の谷間を隠す……
ついでに、勝手に無意識に、横座りになる……

「これが……俺なのか。」

絞り出すように発したのは、今まで聞いたことのない高い声だった。

「声も変わったな。だが、声質は私に似ていないようだ。」

女王が俺の頭に優しく手を置く。
その手はいつも通り温かいのに、今の俺には少し重かった。

「ティルバート……いや、これからは私の娘、ティアリーノ王女だな。
でも、このまま放っておくと、明日には元に戻ってしまう。」

「……え？」

不意に聞かされた朗報。
なんだ、これは 1 日だけの遊びだったのか？
じゃ戻るまでジッとしていればいい……と思ったが……

女王が一生に一度しか使えない禁術なのに、そんなすぐ戻って終わりなわけがない。
その証拠に、女王のまなざしは真剣だった。

「お前が今から 1 時間以内に、女として花開くことで、この魔法は完成して、お前は一生女として生きることが確定する。」

「……どういうことだ……？」

「今から私がお前に、女同士の快楽を与える。
絶頂すれば一生女、絶頂しなければ明日には男に戻る。
元に戻りたければ 1 時間我慢すればいいだけだ。」

そう言いながら女王の手は、俺の薄い生地 of 白いドレスを、脱がしにかかっている……

5 話 女王の手ほどき

「顔をよく見せてくれ……うん、見れば見るほど、私に似ている。これは嬉しい誤算だ。」

「……」

「男だった時は、彼女居ない歴イコール年齢の童貞だったんだらう？」

「なっ……！」

まるで今日の朝食のメニューを聞くような普通の口調で、そんな失礼過ぎることを聞かれた。

そして俺は、面白いくらいキョドってしまった……認めたようなものだ。
今更非童貞だと嘘をついても、絶対にバレるだろう。

「悪かったな……！」

俺は涙声で睨みながらそう言うのが精一杯だった。

「いやいや、私はお前が経験ゼロのまっさらな童貞で良かったと思っている。
今のお前は女、つまり経験ゼロの清らかな処女というわけだ。
ほら、お前にとって初めてのキスを……」

「あっ……んんっ……！」

逃げる間もなく、両手で顔を挟まれ……キス、されてしまった。

俺は男だけど今は男じゃなくて……
女性になった俺が、女性と……キス！？

「ん……チュ……」

「んっ……んんっ……」

女王の唇……柔らかくて、甘い。
でも「今の俺」の唇も負けてないようで、女性同士の柔らかい唇は重なり合って、押し合って……

「んんん！？」

キスの途中だが、俺は驚きの声を上げた。
女王が、俺の大きくなった胸を、ムニユツと揉んできたからだ。

薄い生地ドレスは、いつの間にか、脱がされてしまっている。
下着は付けてなかったのも、ドレスを脱がされたら、もう裸……

「それにしても大きな胸だな。お前が動くたびにタプンタプンと震えて自己主張して。」

そう言いながら触ってくる女王の手の中で、俺の胸は弾んでいる。

「女王、胸、よせ……触るな、揉むな……！」

「この魅力的な胸が悪い。揉んでくれと言わんばかりに私の視界に入ってくるのだから。
と言うか、姿は私に似てしまったのに、胸の大きさだけは似てないようだ。」

「女王は美人だが胸はあまりないからな……」

俺はささやかな反撃のつもりで、女王の胸を見ながら言った。
女王の胸は、多分 B カップくらい……だと、以前から勝手に推測していた。

「ほう、憎まれ口を叩く余裕があるか。ではこの桃色の乳首を……」

「ひい！」

乳首を軽くつねられ、変な声を出してしまう……

「ちょっとつねっただけでその反応か。では舐めるとどうなる……？」

「え？ あっ……ふぁっ、んぁっ……」

俺の大きな胸に、顔を埋め、手で揉みながら、乳首を口に含む女王……

「あッ、は、っあ、はぁ、あッ、あん……いきなり女にされて、胸を食べるみたいにむしゃぶられて、そんなことされたら、俺は……」

「ほほほ、胸だけで泣きごとか。

それより娘よ、さっきからお前の太ももがモジモジしているのに気付いているか？」

「モジモジなどしていない！」

「自分の股間を触ってみろ。

お前のペニスが、この世から消えてなくなったことを確認するんだ。

勇気がないなら、私が上から手を掴んで、触る手伝いをしよう。」

女王に掴まれた俺の手が、俺の下半身に触れ……

「あ……あ……俺のペニスが、本当に……ない……」

「私はいつもお前の股間ばかり見ていたんだ。

勃起してなくてもズボンの中で常にずっしりと存在を主張していて、重くて邪魔そうだと思って。

足枷のペニスがなくなって、新しく出来たサーモンピンクの可憐な割れ目。」

ピチャ……

割れ目に、女王の指が這う—

「あぐっ……」

「この割れ目の奥には、子供を産むための器官が既にある。

生理は早くて来月にはくるかもしれんな。

お前は私と違って若いから、いくらでも子供が産めるだろう、羨ましいなあ。」

「そんなこと、信じたくない…」

色々な感情でやるせなくなっている俺に、女王が涼しい顔で言った。

「さて、余興はここまでに。」

6 話 義母娘で初見合わせ

「今のが、余興……？」

さっきの胸吸い付きで、俺はもう全身甘い痺れが広がって、頭もボーツとしてるんだが……

ゴソゴソ……

そんな俺の耳に、衣擦れの音。

見ると、女王が身にまとっていた黒いドレスをまくり上げていた。

そのままグイッと脱ぎ、下着姿をあらわにする。

大人の女といった感じの、黒のレースのブラジャーと、同じく黒のレースの紐パンティ。

控え目な美乳がブラジャー越しに自己主張しており、ウエストもくびれていて……

初めて見た、女性のこんな姿。

俺は思わず、股間に手を当てて、前かがみ風のポーズになる。

女性になる前の……男の俺だったら、きっとフル勃起……

相手が女王だろうが実年齢は親子ほど離れてようが、お構いなしに襲いかかって……

バコツバコツとマンコの奥を突きまくって「誘惑したあんたが悪いんだああ」とか言いながら、中で果てる……

だがしかし。

繰り返しになるが、もう俺には「ない」、肝心のブツが！！

「ははは、私をどうにかしたくても出来ないその葛藤、よく伝わってくるぞ。

女の下着姿を見るのすら初めてなら、ここを見たらどうなる？」

「……！？」

女王が、パンティの紐をほどき、割れ目をあらわにする。

クチュ……

続けて割れ目どころか、自分で指で広げて、女性の中の部分を見せつけてくる。
その部分はしっかりと濡れて、ステンドグラスの光で反射して、キラリと光る――

「も、もうマンコ見せないでくれ……すごく興奮させられてるのに、勃つものも出すものもなくて……
体の内側で欲望だけ勝手に膨らんで、どうすることも出来ないから、苦しい……」

「ほほほ、そういう気持ちになるのか、TS 娘は。
済まん、私は生まれた時から女だから、そう言われても分からん。」

「そんな……」

「もちろん、興奮させっぱなしにはしておかないさ。
そもそもお前を 1 時間以内に絶頂させないと、女体化魔法はなかったことになり、お前は男に戻る。
一生に一度しか使えないのだから、仕切り直すことが出来ぬ……」

そう言いながら、裸の女王が、裸の俺に押し乗る――

「1 度女同士でセックスすると、抜けられなくなるぞ。」

「……え？ 女同士でなんて、出来ないだろう……？」

「出来るに決まってるだろう、今から教えてやる……」

女王が、濡れて糸を引いている割れ目を、俺の熱くてどうしようもない割れ目に、ピタッと合わせてきて――

「あひっ！」

それだけで、間抜けな高い声が出る俺。

なんだこれ……ピッタリ合わさった割れ目同士から、ビリビリするような感覚が……
これ、ちょっとでも動かれたら、やばい……逃げないと……！

「お、あああ……！？」

逃げようとした俺の動きを察し、女王が俺の体をおさえ、割れ目同士をこすり合わせてくる。
合わさったそこから、信じられないような快感が股から全身に広がり……

「あっ、いや、やだぁ！女王、離せ！それに、なんだ、その馬鹿力は！
勇者の俺が全力で逃げようとしているのに、なんでビクともしない！？」

「この華奢な女王を捕まえて、馬鹿力とは失礼な……んっ、マンコ、気持ちいい♪」

「あ、はひっ、マンコ、ズリズリやめて……！」

「ん……お前が女体化して弱体化しただけだ……んっ……加えて性別が変わったばかりで本調子でもない……相手が女だろうが、押さえつけられて好き勝手されるのは必然だろう……？」

「ん、ん、あ、おお、あああ……おおおお……♡」

ブシャ、ブシャと、お互いの割れ目から熱い液体が出ている……

俺は逃げることも抵抗も出来ず、内側からせり上がってくる快感を、股から全身に広がらせて、悶えるしかなかった……

7 話 王女は女王の手で花開く

股から広がる快感に、戸惑いながら自然とよだれが出て……
不覚にも気持ち良くて……

「……え……？」

快感だけに気を取られていた俺は、恐ろしいことに気付いた。

女王の割れ目が、俺の割れ目をこすることに膨らんでいる……気がする！

と思ったら、女王が体を離し……

「見ろ、これが何か分かるだろう？ お前もついさっきまであったのだから。」

俺はソロソロと、女王の股部分を見て……

「女王の股に、ペニス！！！」

俺が金切り声で叫ぶのも無理はないだろう。

だって、女王のさっきまで何もなかった割れ目に、何故か大きなペニスが、ある！
しかも、それはビーンと上を向いて、フル勃起と言っていい状態になっている。
先走りの白い精子も、タラリと垂れていて……

「え、女王は男だったのか！？」

俺は続けて叫んだ。

「そんなわけあるか、私は女だ、生まれた時から。」

女王はシレッと言った。

「私は魔法の天才であるからして、一時的にふたなりになるくらい、朝飯前。
ほら、ペニスの下に割れ目があるだろう？」

「そ、そんな魔法が……」

「おかげですっかり臨戦態勢だ。このメスペニスを、お前の処女マンコに……」

ピチャ……

「ああああ……」

熱いペニスがあてがわれ、俺はのけぞる。

「ふむ、固く閉じているが、蜜が溢れ出ている、少しずつ入れていくぞ。」

女王は俺の体を押さえながら、俺の中に来る――

「あ、あああ……おあああ……来るな……痛い、女王……うああああ……」

「……ふむ、やはり処女だから、きついな。

かと言ってここでやめるわけにもいかん……出来る限りで力を抜け、挿入るぞ。」

ズズ……

大きくて固くて太いモノが、俺の割れ目を、こじ開けながら、来る！
さっきまで男だったのに、女になって、女に犯される！

「んああああああ！！！！！！」

俺は悲鳴のような声で叫んだ。
視界が白くなりかける。

痛い……すごく痛い……！

男だった時……

セックスって、男はいいけど、女性は嫌だろうなあ、どう考えても痛いだろうし妊娠などリスクも大きい。
そりゃ結婚でもしてもらわない限りなるべくさせたくないわけだ。
……と、他人事でボーッと思っていた。

それを今、自分事として実感することになるなんて！

女王のペニスは、俺の体を内側から引き裂いて奥に侵入して……

「ひiiiiiiiiiiii！！！！！！」

——ブツッ。

体の奥で、何かが破れる感覚が走った。
まるで、自分の中の「男」が断ち切られる音のように！

.....

そして、しばらく経ったのか……？

「あう……う……くう……」

気付くと、傷みと色々な感情で、涙がポロポロ出ていた。

「……奥まで入ったぞ、大丈夫か、王女？」

さすがに心配そうな顔で、女王が頭を撫でながら、聞いてくる。

「う、ううう……こ、このくらい……」

「……それでは、動いていいかな？」

……動くって、あの、パコッパコッってするやつだよな？
ただでさえ痛すぎてジンジンしてるのに、そんなこと、されたら……

「いや、やっぱり、その、俺は…」

ガシッと腰を両手で掴まれる。

「あっ……」

「済まない、なんだかんだで時間が迫っている。」

パン、パン、パン、パン！

突然はじまった、抽挿。

「あ！女王！あ、あ、あ、あ！」

「しっかり処女マンコを突いて、立派な非処女にしてやるからな！」

グチャ、グチャ、グチュ、ズチュッ！

「あ、あん、女王、いたっ、やめっ、あ、あ！」

「初めての経験が、魔法でチンポ生やした義理の母親だとは思わなかっただろ、どんな気分だ！？」

「あん、あん、痛い！嫌だ！マンコも頭も変になる！」

「ほら、そろそろ中に出すぞ！」

バコッ、バコッ、バコッ、バコッ！

あ、女王のペニスが俺の奥を叩きつけるたびに、どんどん膨らんで……！

ビュクッ……！

「ああああ————！！！！！」

体のいちばん奥に熱い飛沫を感じながら、俺は視界が白くなり、目を閉じる……

……………

「この絶頂をもってして、お前は完全に女になった……

一生元の性別に戻ることはない……

ああ、割れ目から破瓜の血が……非処女になった証だ……」

次に目を開けた時には、俺は割れ目から一筋の血を垂らし、ぼんやりしていた……

「女王、俺は……」

「……俺じゃない、私だ。言葉遣いも少しずつ変えていかねばな。」

8 話 初恋、諦めなくていいの？

“処女喪失”から 30 分……

息もようやく整い、ショックの波もひとまず収まってきた頃だった。

女王に白いレースの下着を付けられ、ドレスを着直した俺は、ぼんやりと窓の外を眺めていた。

……俺は絶頂してしまった。

女王は「この絶頂をもってして、お前は完全に女になった。一生、元の性別には戻れない」と言い切った。

俺が男に戻る可能性は、もう、ないのだろう。

この先、ずっと女性の身体で生きていくのか……

そんなことを考えていたとき、女王がタオルケットを肩に掛けながら話しかけてきた。

「ところで……交際経験はないにせよ、好きな娘くらいは居たんじゃないか？」

「……まあ、一方的に好きだった女性は居たけど。」

思い浮かぶのは、男だった頃の、唯一の初恋。

魔王を倒したら、それを口実とセールスポイントにして、彼女の家を訪ねて、申し込むつもりだったのだ……

俺の冴えない見た目と中身では、絶対相手にされない、特に見た目。

だったら「伝説の勇者の子孫で魔王を倒した英雄」という看板で殴って（比喩表現）嫁にするしかない。

だからこそ俺が魔王を倒したかったのに！

今の俺は女性だ。

もうその女性と何かが始まる可能性はなくなった。

胸がギリギリ痛む。

「ほう、その娘のことを、是非教えてくれ。」

「……そんなこと、今更……」

「いいから。私が知りたいんだ。」

……全く、俺を女性にして処女を奪った張本人がのんびりと。

でも、語るだけなら、構わないか。

「……リリィ・アルタシア……という、地方貴族の娘だ……」

去年、鍛錬のために訪れた地方で、たまたま見かけて好きになった。

ピンクのサラサラした髪で、気品があって……とても綺麗で……」

「ほう、姫君や令嬢は一通り把握しているが、地方貴族はさすがに知らんな……スタイルも良いのか？」

スタイル……という言葉で、俺は思い出す……

彼女は全体的に柔らかそうで身長もあり、胸とお尻が大きかった。

抱いたらすぐ子供が宿りそうな……そんな女性的で魅力ある印象。

彼女の姿を目に焼き付けて、シコったことすらあった。

話したこともない女性をオナニーの材料にする、最低童貞ゴリラだったのだ、俺は……

「どうしたティアリーノ王女？」

「あ、いや……」

もう、リリィのことは忘れよう。そう思って首を振った。

……にしても、ティアリーノ王女と呼ばれるの、嫌だな。

「……どうせ駄目なら、こうなる前に、せめて話しかけておけば良かった……」

「ふむ、まだそのリリィとやらが好きなんだな」

「……でももう、どうしようもないから、忘れるよ。」

「どうして？ 忘れる必要なんてないぞ。」

「え？ いや、俺はもう男じゃないし……」

「近いうち、お前とお見合いしてもらえないか、私からアルタシア家に打診してみるさ。」

「いや、俺は女性になったんだ。リリも女性で……無理だろ！」

「無理かどうかは本人に聞いてみないと分からない。
女同士でも構わない系の娘かもしれないじゃないか。」

……なるほど。
それは考えたこともなかった。
どうせ無理なら、打診して断られてから諦めても遅くはないかもしれない。

「……仮にもし、今の女性になった俺と、リリが付き合ってくれて、結婚出来たとして……世継ぎ問題、どうするんだ？」

「えらいぞ王女、もう世継ぎまで考えてくれているのか！
それも大丈夫、子供を作るときだけ、私の魔法でお前をふたなりにすればいい。」

「……なんでもありだな。」

「そうだろう？ 勇者としては終わってしまったが、お前には TS 王女として最高の人生を楽しんでほしい！」

9 話 王女人生、ゆるりと開始

怒濤の女体化から、1 週間。

家や荷物の整理を済ませた俺は、遂に……TS 女王国の王城へと足を踏み入れた。

城に入ること自体は、昔から何度もしていて数え切れない。

でも、女性として、王女としては、初めての入城だった。

この 1 週間、俺はずっと人目を避け、王都の外で身を潜めていた。

理由は簡単だ。

魔王討伐の報が国から正式に発表され、もう全国民が知っているから。

民の期待を背負っていた勇者ティルバートが「用済み」になったことも、同じように周知されている。

表向きは「勇者ティルバートは、自分探しのために目的のない旅へ出た」ということになっている。

そして、その代わりに現れたのが、ティルバートの妹「ティナ」。

女王に似た美貌ゆえ、女王の養女として迎えられ、名を「ティアリーノ」と改め、次期女王に——。

……もちろん、全部女王が考えた、嘘っぱちの、「設定」。

俺は旅立っていないし、妹なんて存在しない、ひとりっ子だから。

なぜ、わざわざ“妹設定”にしたのか。

それは、TS 王家と勇者一族が血縁関係にあるからだ。

俺と女王は親戚で、血筋的にも繋がっている。

俺の妹であれば、女王に似ている理由もキツイけど一応説明がつくし、国民の反感も買いにくい。

いきなり無関係な一般人女性が王女になるより、女王の親戚で勇者の妹という肩書きがあるほうが“まだ納得出来る”のだ。

この事実を知っているのは、ごく限られた者たち……大臣クラスと、俺の身の回りを世話するメイドくらい。

俺はこれから、「ティルバートの妹であり、王女となったティアリーノ」として生きていく。

……でも、悪くないかもしれない。

部屋は常に整えられ、メイドたちがかしずいて身の回りの世話をしてくれる。

朝・昼・晩、美味しい料理が運ばれてくる。

鏡を見れば、そこに映るのはゴリラではなく、銀髪の美女。

……うん、悪くないかもしれない。

「今日のランチは何かな。」

そんなことをぼんやり呟きながら、俺が自室の椅子にダラーと腰掛けてしていると……

バーン！

いきなり女王がドアを開け放ち、部屋に入ってきた。

いつものことなので、俺は特に反応しない。

女王にかかれば、俺にプライバシーなどない。

ノックして入れと言っても「考えておく」としか言われず、鍵をかけても合鍵で入ってくる。

だから、俺は鍵をかけるのもやめていた。

「ごきげんよう、王女。」

「……ごきげんよう、お母さま。」

養子縁組しているので、女王のことは「お母さま」と呼ぶ決まりだ。法律的にも親子。異論はない。

「全く、そのご飯のことしか考えてない顔はどうした。」

「そう言われても……」

「お前が片想いしていたアルタシア家のリリィのことだが——」

ガッ！

俺は勢い良く椅子から立ち上がる。我ながら分かりやすい反応だ。

「お前とお見合いしてもらえよう打診しようと思っていたが、まだ行っていない。」

「……そ、そうなんだ……時間がある時に、ぜひよろしく……」

「いや、行けないな。」

……俺は間抜けヅラでポカーンとしてから……

「なんだよ！ 諦める必要はないって言ってくれたじゃないか！ あれはその場限りの嘘だったのか！？」

「ああもう！ 叫ぶな！ お前は声が高いんだから！ 今の状態では行けないという意味だ！ 座れ！」

俺はモゾモゾと椅子に座り直す……

「この一週間、お前を見ていたが、完全に受け身だ。

自分を『私』、私を『お母さま』と呼ぶこと、男言葉を使わない、という約束は守っている。

しかし、女としての振る舞いを学ぼうとしたりメイクに挑戦するなどの積極性は皆無。」

「で、でも急に言われても……」

「でもない。直後ならまだしも、もう1週間経ったのだぞ。

私は頑張る者は好きだが、何もしない者は嫌いだ。

何もしない者のために、好きな娘とのお膳立てをしてあげようとは思えない。」

「う、うう……」

「それに、その座り方……」

ガバーと足を開いてダラーと座る俺を、女王が鋭く見下ろす。

「完全に男じゃないか。どうせスカートの中も……」

ガバッ！

「うおっ！」

いきなりロングスカートをめくられ、声質は女性でも、思わず「男っぽい短い悲鳴」が出てしまう。

「なんだその悲鳴は！それにそのダルダルで色褪せた男物トランクス！タンスに入っている女物下着はどうした！」

「だって、トランクス楽だから……スカートの中なんて見えないんだからいいだろ？
女王のようないきなりスカートをめくる不作法者以外には……」

「分かった、私が女性としての特訓をさせるしかないな。」

「え、えええええ……！？」

10 話 不健全な女性レッスン

「まずは服を脱げ！」

女王が言い放った。

「服って『まず』脱ぐものなのか……わっ。」

ムニョッと、女王の手が俺の胸を無遠慮に揉む。

「何をする！」

「お前が反抗的な態度をとったり、意に反したことをしたら、胸を揉むことにした。」

「ああ～……分かったよ……」

俺は渋々、着ていたブラウスと、ロングスカートを脱ぐ。

ブラジャーは付けてなかったの、生乳が放り出される形になり、さすがに両手で隠す。
下はさっき見られた通り、ダルダルで色褪せた男物トランクス。

「はぁ～～～……」

俺の姿を見た女王が、額に手を当てて、大きなため息をつく。

「……ひどい姿だ……とても王女に見えない……そもそも、何故ブラジャーをしていない？」

「締め付けられる感じで、なんか嫌なんだ、気持ち悪くなってしまって……」

「……まあ、1 週間前まで男性だったんだから、違和感しかないだろうけど。」

「逆に聞けど、女王は気持ち悪くないのか？ あんなワイヤーが入った変な布を 1 日中付けて……」

「別に気持ち悪くなどない、こればかりは慣れるしかないな。
これから毎日、朝起きてから寝るまで、ブラジャー着用を厳命する。」

「うう……はい……」

「サイズだが……」

女王がゴソゴソと、タンスを漁る。
そして白とピンクの、2 枚のブラジャーを手を取った。

「多分、E カップか F カップだろうと思い、両方ともを買って入れていたのだ。
この際だからどっちなのかハッキリさせて、今後はそのサイズを買うようにしよう。
ほら、胸から手を離して……」

俺が手を離すと、プルッという効果音と付けたくなる感じで、胸がちょっと揺れた。

女王に E カップと F カップのブラジャーを付けられたり外されたりしている間、俺はモゾモゾしていた。

男だった時は、胸に何か布を付けるなんて、考えたこともなかった、変な気持ちだ……

「……どうやら F カップのようだな。ほら、ブラジャーにオッパイを収めるんだ。」

「お、収める??？」

「ブラジャーからちょっと肉がはみ出しているだろう。カップに手を入れて……」

「あっ♡」

女王の手がブラジャーの中に入る。

「なんだ、ちょっといい声が出たじゃないか。」

「う、うるさい……」

「こうやって……はみ出している胸を、入れて、ギュッとして……」

「ん、んん……」

「ほら、谷間も綺麗に整った。」

「う、うん……」

……しかし、こうブラジャーを付けて、谷間がハッキリした状態で改めて見ると、俺の胸、大きいな。

うん、小さいよりかは、大きい方がいいよな。
大は小を兼ねると言うし。

「ではその、ダルダルで色褪せたトランクスを脱いで。」

「はい……」

ゴソゴソと、トランクスを脱いだ。
薄い陰毛が生えた下半身が晒される形になり、さすがに手で隠す。

「お前が持ち込んだ男物の下着は、全部焼却処分するから、出しておくように。」

「分かりました……」

「ではこの白のパンティを履くんだ。」

俺は大人しくパンティを受け取り……恥ずかしいのですぐに履いた。

「あ……」

なんだろう、このパンティの柔らかくて滑らかな素材は。
シルクっていうのかな？

そのパンティを足に通すと、ドキドキした。
上げる時、股にぶら下がっていた立派なものがもうないことも実感した。

「これを着なさい。」

女王が一着の服を渡してくる。

俺は黙って受け取る。

なににせよ、今下着姿なので、何か着たい。

胸元にリボン、袖口にレースが付いている、可愛いワンピース。

しかし……

「スカート、短くないか？」

「いいから。(胸を掴んでしながら)」

「それやめてくれない？」

どうせ拒否権なんてないんだから、着ると……

「み、短っ……！」

ちょっと歩いたりかがんだりしたらパンティが見えそうなミニ丈。

しかもフワフワした素材なので、危なっかしいことこの上ない。

「嫌だこんなスカート！せめて長いのを……！」

スカートの端を手で握りしめ、抗議。

「椅子に座れ。」

女王が涼しい顔で急に命令してきた。

「話聞してるか！？俺……私は、短いスカートは嫌だと言っている！」

「いいから座れ。」

「ぐう……」

仕方なく、座る。

両膝を合わせ、スカートの上に手を置き、パンティが見えないように死守。

「……うん、ミニスカートに限るな。そうやって嫌でも仕草が女らしくなる。

こちらが言うまでもなく、足をガバーと開く男座りもしないだろう、そんなことしたらパンティが丸出した。

スカートがめくれないようにしずしず歩くだろし。

これからは当面、膝より上の丈のスカートを着用するように。」

「う、うう……恥ずかしい……」

「恥ずかしいついでに、ベッドの上に上がれ。」

「え……え？？」

……どうせ拒否権はないんだろうから、上がるしかないけど。

俺はモゾモゾとベッドに上がって、横座りをして、膝に両手を置く。

「仰向けになれ。」

「う、うぐ……」

スカートを手で死守しながら、仰向けになる……

「足を開け。」

「え、嫌に決まってる……やああ！」

ガバツと両手で両膝を開かれる。

ベッドの上でミニスカートで M 字開脚することになり、パンティは丸見えで……

俺はたまらず顔を手で覆う、顔が真っ赤になっているのが分かる……

「あはは、顔隠して股隠さず、だな。」

「……そんな言葉、ない……」

「それにしてもいい光景だ、指の隙間から赤い顔が見えている。
やっぱり女性らしさと恥じらいはセットらしい。」

「ううう……嫌……足、閉じさせて……ひいい！」

女王の指が、ツツと、俺のパンティの股部分を縦になぞる……

「ん～～？ 嫌な割には、クロッチが湿っているが？」

「くろっち……？」

「パンティの割れ目が当たる部分のことだ。どれ……」

スルッと、パンティが脱がされた！

「いやあああ！！」

「なんだ、またいい声が出たじゃないか。」

「嫌だ！ 恥ずかしい！ オマンコと割れ目の中が丸見えで……せめてパンティだけでも履かせて！」

「湿っていると思ったら、やっぱり濡れているじゃないか。」

「ああああ♡」

女王の指が、割れ目に這う—
ビリッとくるような、甘い快感が訪れる。

「ブラジャーを付けたり、恥ずかしい思いをさせられて、マンコはちゃっかり濡らしているとは。」

「違うう♡」

「違わないだろう、濡れているのが何よりの証拠だ。
それにしても、綺麗なマンコだな、ピンクで陰毛が薄くて……」

女王が顔を近付ける。

「やっ、見ないで、マンコ見ないで！」

「そう言われても、目が惹きつけられてしまうな。
しかもこのマンコは 1 週間前に処女を失ったばかりの、日の浅い非処女マンコであるからして。
まあ、奪ったのは私なんだけどな。」

ピチャ……

「へっ！？」

女王が、俺のマンコを割れ目に沿うように、舌で舐める。

「え、嘘でしょ！？マンコ舐めないで！あ、あああああっ！」

マンコから出る透明なネチョネチョした液体を、味わうように舐められる。

「やっ、なんでそんなとこ舐めるの、お母さま！」

「なんでって、ここに美味しそうなマンコがあるから、かな？
お前も分かるさ、相手が出来れば……」

「ん、んんっ！」

「ふふ、奥が固くなってる……」

女王が舌をさし入れながら、言う。

「クリトリス、しっかり反応してるじゃないか。」

「く、くり、と？」

「……性的用語も少しは教えないとな。まあいい、このまま伊ってしまえ。」

クチュ、ピチャ、ベロツ……！

「あ、あ、ああああ！ 駄目え—————！！！」

俺はのけぞり、ビクビクうとした。

つま先が浮く感じがする……

（……なんでマンコじゃなくて、行為とは関係ないはずのつま先がフワフワするんだろう……？）

そんなことをボートと思っていた……

11 話 王女の一步、勇者だった時の記憶

その翌日から—

私は、ようやく腹を括った。

もう「俺」じゃない。

私は女性で、TS 女王国の王女で……次期女王なのだ。

ならば、逃げや受け身はやめて、胸を張ってふさわしい人間にならないと。

まずは小さな一歩から。

心の中でも“俺”と男言葉は封印。

朝は下着やストッキングを吟味して、女性らしさを育てるため丈の短いスカートを選ぶ。

城内では自室を除き、常にハイヒール。

「慣れておかないと公の場で恥をかくぞ」と女王に言われたからだが……

正直ハイヒールって、拷問具じゃない？

1 日履いただけで豆が出来るなんて。

あれを普通の顔で普通に履いている世の女性たちを改めて尊敬。

歩き方は小股でしずしず。

立つときは背筋を伸ばして手を重ね、座れば膝を閉じて上に手を置く。

食事も控えめ、仮にも王族が肥満じゃサマにならないし。

それに、男だった頃より不思議と食が細くなった。

メイドにお願いして、メイクも学び始めた。

最初は全部やってもらっていたけれど、毎朝 30 分も時間をとらせるのは申し訳なくて……

「なら自分で」と挑戦してみたら、毎日が悪戦苦闘。

その朝も、私はぎこちない手でパウダーファンデーションを塗っていた。

バン！

おなじみの「NO ノックドア開け放ち」で、女王登場。

「おお、今日も自分でメイクしているのか。」

「でも全然上手くいかないの。粘土を伸ばしたみたいで……」

「ほほう。化粧水や乳液を塗った直後にファンデーションを乗せてないか？ 乾いてないとよれるぞ。」

「あ、なるほど、じゃあ乾くまで 3 分くらい待てばいいのね。」

「うむ。ところで今日、舞台観劇に行く。メイクを終えたら、一緒に来るか？」

「えっ、舞台なんて初めて！ 嬉しい！ 行く行く！」

——そう。私は舞台なんて本当に観たことなかった。

男だった頃、勇者一族の「期待のエース」として、ひたすら鍛錬と戦いだけを強いられていた。

娯楽なんてもってのほか。

ゴミ捨て場で拾った漫画を空き地でこっそり読むだけでも、父に見つかれば暴言と暴力の嵐なので、命懸けだった。

父は、私が 15 才の頃に亡くなった。

20 代の時に体を壊して剣を振るえなくなってから、私に「勇者」としての全てを押し付けて……

私が思い通りにならなければ「連帯責任」と称して母も殴り飛ばした。

母は私が 10 才のとき病で他界した。

今にして思えば、父の暴力と「勇者の母」としてのストレスが拍車をかけたのかもしれない……

.....

5 時間後……

私と女王は、観劇を終え、和食のレストランで食事をしていた。
一般客は入れない個室に裏口から入らせてもらって……こういう時、王族としての「役得」を感じる。

「ん～～～このトロのおスシ、美味しい！」

「うん……米に生の魚を乗せることに抵抗を感じるが、悪くはないな……」

私のリクエストで「スシ」という珍しい料理をいただいていた。
女王はその料理の見た目に抵抗を感じて最初は遠慮していたが、気に入ったようで箸が進んでいる。

「ねえお母さま、このボタンエビってやつも頼んでいい？」

「いいぞ、私も食べてみようかな……ああそうだ、アルタシア家のリリィのことだが。」

「ぶぐっ……！」

危うくお茶を噴き出しそうになり、必死でこらえる。

「……お、お母さま、重大なことを日常会話の中にサラリと挟むのやめてくれる？」

「別にいいじゃないか。お前が王女として入城してなんだかんだで 2 ヶ月経った。」

「ああ……もう 2 ヶ月も経つのね……あっと言う間だね……」

「うむ、お前が女性としても王族としても頑張っているし、何より楽しそうで笑顔も多く、私も嬉しい。
そろそろアルタシア家に打診してもいいのではと思ってな。」

「ううう～～嬉しいしありがたいけど……やっぱり女性同士だから断られると思うんだけど。」

「だからそれは本人に聞いてみないと分からないじゃないか。
それに断られたら断られたで、別にいいだろう？
お前がもっと美しさを磨いてから、別の令嬢や姫君に申し込めばいいだけだ。」

簡単に言ってくれる……

と言うか、私が女性ではなく男性に申し込めばいいだけかもしれないけど。

でも、それは無理。

2 か月前まで男性だった私が、男性を恋愛対象にするなんて出来るわけがない。

「……お母さま、アルタシア家に打診に行くのは、いつ？」

「明日だ。」

「明日ああああ！??」

12 話 リリィ・アルタシア

翌日の午後……

数人の大臣と護衛だけを伴い、私は女王と共に、アルタシア家の邸宅を訪れていた。
今日ばかりは、少しでも綺麗に見せたくて、メイクはメイドに丁寧に仕上げてもらった。
そして式典でしか着ないような純白のドレスを身に纏う。

アルタシア家に、あらかじめ事情はすべて伝えてあった。
勇者の妹は架空の存在で、私こそが女体化して王女になった勇者本人だということ。
ここまで来て嘘をつくことはできないし、後で露見して破談となれば王家の信用にも傷が付くからだ。

—そして今、その彼女が目の前に居る。



リリィ・アルタシア。
勇者だった頃、偶然見かけたのは 1 年前。
その時から、心の奥に仕舞っていた憧れの女性。

ピンクの髪は腰を超えてお尻まで伸び、毛先だけふわりと遊ばせている。
同じ 20 才とは思えないほど大人びた雰囲気。
ピンクのドレスワンピースに身を包む姿は、まるで絵画から抜け出した姫君のようで……

「……お見合いのお話と、王女様のご事情を伺って……大変驚きました……」

彼女の背後に立つ父親が、恐る恐ると言った感じで、口を開いた。

「そ、その……我々は下級貴族に過ぎず、裕福でもありませんし……」

しかも側室ではなく正室としてとのことで……ありがたいお話ではありますが、あまりに恐れ多く……
辞退させていただきたく思います……」

胸がヒヤリと冷える。

これは体裁上の断りなのか、それとも「レズ王女に娘を嫁がせられない」というのが本心なのか……

一瞬、もう引くべきかと思った。

だが、目の前のリリィは、私と床を交互に見ているだけで何も言わない。

本人が断りを口にするまでは、諦めない。

ここで引いたら、一生後悔する。

「……あの、私はどうしても、リリィさんにお嫁さんになってほしいと1年前から思っていました。」

「……1年前から、ですか……？」

初めて、リリィが私に視線を合わせ、か細い声で尋ねてきた。

「う、うん……勇者だった時から、あなたを知っていました。」

魔王を倒したら正式に申し込むつもりで……でもあなたたちも知っての通り、『用済み勇者』になって、男としては申し込む機会を失って……」

「……」

「だから今、王女として、あなたに改めて申し込みをしています。」

難しいのは分かっていますが……どうか、交際の機会をいただけませんか……！」

言いたいこと、全部言った。

断られたら、潔く諦めよう。

.....

長い沈黙が落ちる。
私の鼓動がうるさいほど速かった。

—そして。

「そ、そんなに……そんなに頼まれたら……」

リリィは赤くなった頬を押さえていた。

「わ、分かりました……恐れ多いですが……交際、お受けいたしますわ。」

その瞬間、私の胸の奥で何かが弾けるように、安堵と喜びが溢れた。

13 話 百合恋、満喫中—からの、婚前交渉前日

お見合いから2ヶ月後……

私が毎日が楽しくて仕方ない。
生まれて初めての恋、ずっと好きだった女性と、絶賛婚約中なのだ。
時々ひとりで「へへへ〜」と変な笑いが漏れる。

週に2回はデートをしてもらっている。
会えない日はラブレターを書き送っている。
もちろんちょっとしたプレゼントを添えることも忘れない。

私も一応、王族としてしなければならないことがあるから、デートは週に2回が限界なのだ。
女王の外出に同行させてもらったり、他国との会談に参加させてもらったり。
講師を呼んでの勉強も結構がつつり組み込まれている……王女が無知では困るからね。

それにしても、デートは街にお出かけしにくいのが誠に遺憾だった。
護衛をゾロゾロ引き連れないといけないので、ムードもへったくれもない。
王女とその婚約者がフラフラ出歩くのは難しいのだ。
こういう時、王族はつまらない！

なので室内でのデートが中心になるが……
私は毎回趣向を凝らして、リリイに楽しんでもらおうと頑張っていた。

そして今日は、王城にリリイを招き、アフタヌーンティーを楽しみましょうというプランを立てていた。

リリイはいつも通り、時間より早くに来てくれた。

……………

アフタヌーンティーを楽しみ、メイドに食器を片付けてもらって、私の部屋で2人になる。



私が何の気なしにソファに腰掛けると、リリィが照れ笑いしながら、隣に座って、手を重ねてきた。

距離が近い、とってもいい匂いする。

なんだろうこれ、桃の香りのコロソ？ 思いっきり息吸い込んだじゃう！

「……わたくし、正直に申し上げますと、ちょっと不安だったんです。」

リリィが切り出した。

「いくら今は女性とは言え、元々は屈強な勇者の男性だったということですから。」

「そう言えばリリィって、女性同士での抵抗は特にない……のかな？」

これは聞いておきたかった。

「ええ。」

リリィはアッサリ認めた。

「男性が苦手……とまでは言わないのですが。
恥ずかしながら昔から女性に注目してしまうことが多かったですわ。」

「そうだったんだ。」

「でも今は、そんな不安吹き飛んでいます。
可愛らしくて、物腰柔らかく、ユーモアもありになる。
それに、わたくしのことをとても大事にしてくれるのが、何より嬉しい。
わたくしとんどん、あなたに惹かれてっています。」

胸がいっぱいになった瞬間—

チュツ。

彼女のほうから軽く唇を重ねてきた。
反射的に抱き締めると、リリイも強く抱き返してくれる。
体温も鼓動も混じり合って、私は溶けそうだった。

.....

リリイが帰る時間になり……

「今日も楽しかったね！リリイ！」

つついテンション高めになってしまう私……恥ずかしい。

「はい！素敵なアフタヌーンティーをありがとうございました！」

でもリリイもテンション高いし、いいのかな？

「次はいつ会えますか？わたくし、明日も大丈夫ですわ！」

「明日かあ……」

せっかくの婚約者のお誘い、明日も会いたいのは山々だが……

「明日は……申し訳ないけど、ごめんね。

午前は歴史の講師を招いているんだ。

午後はお母さまの会食に同行させてもらうことになっていて、帰りが何時か分からないの。」

「そ、そうですか……それではあさっては？」

「あさっては、午前はドレスの採寸で服飾師が来るんだ、そのあとは美容院。

午後は隣国のマウスバリー王国との会談があって、例によって私も行かせてもらうことになってて。」

「お忙しいのですね……では次にご都合がつくのは？」

「1週間後になっちゃうんだ。」

「ふええ～……寂しいですわ～……」

婚約者の寂しそうな顔に、胸が痛む。

でも、かと言って王女の予定と責務を放棄出来ないし。

「毎日、お会いしたいですわ……」

ふわりを髪を揺らして、私に抱きついてくるリリィ。

「う、うん、私も……」

「毎日、強制的に会う状況にしたいですわ……」

胸をムニムニと押し付けながら、そんなことを囁くリリィ。

その甘い囁きと柔らかな胸の感触に、私は衝動的に彼女の唇を食った。

リリィも受けて立つと言わんばかりに舌を絡めてきて……世界は二人だけになった。

.....

リリイが帰ったあと、パンティのクロッチ部分が濡れていた。
でも婚約者をオナニーの材料にするのは憚られ、ねちゃねちゃしているオマンコをティッシュで拭くだけにとどめた。

うーん、こういう時、女性っていいなあ。
だってティッシュで拭いて、それでなかったことに出来るんだもの。

男性だった時は、こうはいかなかった。
勃ってしまったものを無視することは男性の構造上、不可能だからだ。
どんなに罪悪感があっても、オナニーの材料にする以外、どうしようもなかった。

私はリリイとのやり取りを思い出し、ひとりでニヤニヤ&バタバタ。

“毎日、強制的に会う状況にしたいですわ……”

あれってどういう意味かなあ？
プロポーズして下さいって……こと！？

バン！

おなじみの「NO ノックドア開け放ち」で女王登場。

「婚約者との百合恋、満喫しているようだな。」

「え、あはは……おかげさまで。」

「仲がいいのは何よりだが、婚前交渉はしてないだろうな？」

「ぶはっ！」

思わず変な声が出る。
私は姿勢を正してから……

「誓って、してません。キスとかはしましたけど。」

「うん、まあさうだろうな。済まない、カマをかけただけだ。」

「……なんでそんなこと聞くの？」

「仮にも王族とその婚約者ゆえ、結婚前にそういうことがあると、取り繕うのが面倒だからな。まあせっかくの初恋だ、健全に楽しんでくれ。それでは、おやすみ。」

……女王が退室したあと、私は考える。

婚前交渉なんて、考えたこともなかったけど。
改めて考えたら、私はリリイとキスやお触り以上のこと、したくてたまらない。
リリイも、同じ気持ちだろうか。

んんん……次会えるのは1週間後。
もちろんデートの約束は取り付け済みだ。

その時、結婚して下さいって、言っちゃおうかな！？

でも、指輪とかどうするんだろ？
指のサイズや欲しいブランドも知らないのに、安直に用意するのはリスクが高過ぎる。
ならせめて花束を用意しようかな？

1週間後の、正式申し込みに向けて、頭を悩ませる私。

明日それをすっ飛ばした事件が起きるとも知らずに……

14 話 婚前交渉前編～ラブイチャからの肉食クンニ～

翌日……

リリイに言った通り、私は朝からガッツリ予定があり、忙しかった。

午前は歴史の講師を招いての勉強。

午後は女王の会食に同行。

帰って自室で落ちついたら、時計は 23 時をまわっていた。

今日は午後からずっとハイヒールだったから、足が痛い。

やっぱり豆も出来てる……ハイヒールって、いつか慣れるんだろうか？

ブラジャーを外し、ネグリジェに着替え、ベッドに沈んで、目を閉じていると……

「こんばんは、王女さま、リリイです。」

「ぎょへえ！？」

いきなりリリイがベッドに腰掛けていて、私は奇声を出してしまった。

「え、な、なに？ デートは 1 週間後の昼でしょ。なんで夜に勝手に部屋に居るの？」

「すみません……マナー違反にもほどがありますが、お許し下さいまし。

お部屋の鍵はいただいていたので、こっそり入って、クローゼットに潜ませてもらっていました。」

んんんん……確かに『婚約者として鍵渡しとくね ♪』って浮かれポンチで渡したけども。

「いや～ 来ること自体はいいんだけど、いきなり居たらビックリする……わっ！」

——その瞬間、ガバッとリリイが勢いよく抱き付いてきて、私は目を白黒させた。

「あの、わたくし、王女さまとお見合いして2ヶ月交際させていただいて……
最初は、頼まれたから仕方ない程度でしたが、今では毎日あなたのことばかり考えるようになりました！
デートの時、いつもキュッと手を握って下さるでしょう？
手がずっとあまずっぱい感じで、体が熱くなって、オマンコキュンキュンして！」

「オマンコキュンキュン！？」

リリイの上品な口調から飛び出す『オマンコキュンキュン』に私は面食らう。

「愛液もいつも滲み出てる状態で！もう気持ちも体の疼きもおさまらなくて！」

「愛液滲み出てるの！？ちょっと待って落ちつ……んっ！」

抱き付かれ態勢のまま、噛み付くような勢いのキスをされる。

うわ、どうしよう。

私は抱き締め返す手の動きの流れで、リリイのお尻を触っている。
この状態で、朝までこれ以上のことをせず過ごすなんて無理！
でも、まだ正式なプロポーズしてないのにいいのかな、どうしようどうしよう。

「王女さま、綺麗な銀色の髪ですわね……」

口を離し、リリイが私の髪を撫でる。
サラサラと、手で遊ばせる感覚に、私はくすぐったい感じになる。

「それに……スンスンスン……ふー……！はー……！」

リリイは恥ずかしげもなく、鼻を思いっきり鳴らす。

「ああ、王女さまの良い香りが、わたくしの鼻と理性をダイレクトに攻撃してきますわ。」

「リリイこそ、とても良い香りで、理性もっていかれるよ。体の奥が、それこそオマンコキュンキュンする。」

「やん、王女さまもそういうことおっしゃるのね。」

「先に言ったのはそっちでしょう。と言うか、リリイは“そういうつもり”で夜這いに來たんだよね？」

「そうですね。結婚前にそうなるのはまずいかもしれませんが、気持ちがどうにもならなくて。」

「うん……じゃ、まずは……お互い裸になろうか。」

ええい、もう、リリイを抱こう。

そもそも婚約してて結婚は既定路線なんだから、そんな問題になると思えないし。

私はリリイが着ていた薄手のピンクのワンピースを脱がした。

花柄の綺麗な白のブラジャーと、同じ色と柄のパンティを履いている。

私はリリイのブラジャーのホックを外すと……

プルン♪

と効果音を付けたいくなる感じで、リリイの丸い大きい胸が飛び出した。

「知ってたけど……オッパイ大きいね。何カップあるの？」

「えへへ、G カップですよ。でも、G がちょっときつく感じることもあって、H カップに変えるかも……あら♪」

私は早くマンコも見たくて、勝手に白のパンティも脱がした。

クロッチ部分が濡れているのが見えて、思わずその部分のにおいを嗅ぐ。

「きゃっ、何をなさるの！」

「ごめんごめん、つい嗅いでみたくて……」

「パンティよりわたくし本人をご覧になって！」

「うん、見るね……わ、綺麗な縦筋……陰毛はほとんどないんだね？」

「ん……体毛が薄い方で……陰毛ほとんどないんですの……」

わたくしだけ裸でそこ見られるの恥ずかしい……王女さまも脱がせますわ！」

マンコの割れ目を開いてじっくり見たかったけど、リリイが体を起こしたので、それは後回しになった。

リリイが私のネグリジェを脱がしてくれた。

ブラジャーは外していたので、履いていた白のシルクのパンティをスルリと脱がされる。

「そ、それじゃ、抱き合ってみようか。」

「ええ！」

ギュー……と、生まれたままの姿で抱き合う。
お互いの甘い匂いを、息を吸い込んで、嗅ぎ合う。

「……ね、ずっと当たってる。わたくしたちの大きな胸と胸が。」

「うん、ずっと胸同士がフニフニしてる、乳首も当て合おうか。」

「ん、や♪王女さま、乳首固くなってますわ。」

「ん、リリこそ、ずっと乳首ピーンってなってるよ。柔らかい……たまらない……」

私たちはオッパイを当て合いながら、モミモミし合い……

あ……私もだけど、リリの息がどんどん荒くなっていく……
ああ……顔が“発情したメス”になってる……
私も……“発情したメス”になってるんだろうか……

「はあ、はあ、王女さま、ちょうだい、あなたの全てを！」

「も、もちろんあげるし、私もリリの全てをもらうけど……きゃっ！」

ガバツと押し倒され、グイッと足を開かれる。

「やっ、足開かされたら、マンコの中丸見えになっちゃう！」

「ああ、サーモンピンクの美しいオマンコ……んちゅっ！」

「あひい！？」

いきなり、ワンクッションなしで、リリが私のマンコにむしゃぶりついてきた！

「じゅる、じゅる、ん、ぐじゅる、んんん、ああ、じゅるじゅる、ぶちゅちゅちゅ、グチュツ！」

「あ、あああ、ちょ、それ、だめっ！」

しかもむしゃぶりつく動きの流れで、思いっきり舐めてくる！

「ぐじゅっ。グチュツ……ニユル、ビグッグチュツ……！グジュ、グチュっ！ぶしゃっ！！」

「ひいい……もう舐めると言うか、“食べる”じゃないの、これじゃ！」

「ズチュ、ズチュっ！グチュ……グチュツつ、グジュ、グチュっ、グチュ、ぐじゅっ、じゅるるるる！」

「おおおお、ああああ、リリイ、ちょ、ああ、ああん、だめええ、それだめ、むしゃぶりすぎ、マンコ食べないで、あああ♡」

「ずちよっ、ズチュ、ずちよっ、ぶしゃっ……！にゅるっ！ぐじゅっ……グチュ、ずちよ！！ズチューーーーー！！」

「やああああん！！！！」

トドメって感じでズチュー！と吸われ、私はイってしまった。

15 話 婚前交渉後編～蕩ける百合セックスで交わる 2 人～

「……ん～はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……」

やっとリリイが私のマンコから顔を離して……

「王女さま、心も体もひとつになりましょう！」

そう直球で言ってくれるのは嬉しいが、されっぱなしは駄目だわ。
私は負けじとリリイを逆に押し倒し、押し乗る。

「うん！ ひとつになろうね！ オマンコ、合わせるよ！」

私はグイッとリリイの両膝を開く。

「きゃっ♪」

真っ赤になってワクワクして見てくる顔と、濡れて透明の液体でネットネットになっているオマンコ……
なんて可愛くてエッチな嫁なのかしら。

思わずマンコむしゃぶりたい衝動に襲われるが、それはそれよ。
後日好きなだけむしゃぶればいいわ。
今は……リリイの百合処女をもらう。

そして、さっきリリイに肉食クニされてイッたから、私のマンコは余計に発情して臨戦態勢。
早くこの目の前のマンコを寄越せと愛液をヨダレのように垂らして主張しているわ。

私はリリイのマンコを指で広げ、自分も足を開き、マンコでマンコにキスする――

ピチャ……

「やん♪」

「あ♪」

同時に惚けた声を出す。

「ああ～ん、熱いですわ～、濡れているピラピラがピッタリと抱き合うようにくっついて……」

「うん、本当、あつ……」

「王女様、キスしましよ、ちゅ、ちゅ。」

私の首に抱きつき、キスをしてくるリリィ。
私たち、口でもマンコでもキスしちゃってるう。

「ああ～オマンコ合わせたところビリビリしてる、割れ目を何度も押し付けちゃいますわ！」

グチュ、グチュッ、グチュッ、ぷしゃ……グチュ……グジュ……！

「はへええ！」

リリィが下からマンコをこすり合わせてきて、私は目を白黒させかけ……

「わ、私がこするの！ あんっ、私がリリィを娶るんだから！」

「どっちでもいいでしょ、そんなの、ホラ、あはっ、ほらああ！」

ズリッ！ズリッ！とこれみよがしに攻めてくるリリィ。

「あ！あ！でも気持ちいい、愛液が混ざり合って、文字通り溶け合ってるね！」

「いいい♡女性同士で腰振って、割れ目こすりあって、エッチ過ぎるう！
わたくし、セックス初めてなのに、王女さまを食っちゃってますう！」

「私たちの大きな胸もポインポインして、何がなんだか～♡」

「あはあん、割れ目が奥までこすれて、ヒダが絡み合ってる！」

クチュクチュクチュクチュ！

「おほほお！ひいいい！おあああ～！んひいいい！うほああ～！」

私は快感のあまり、下品とも言える声を出してしまう。
だって気持ち良くて、気取って「あーん」って言う余裕なんかない！

「あ！王女さまが変な声出してる！可愛い！わ、わたくしもっ！うおおん、おおん、あひい、ひぎゅう♪」

リリも真似して変な声を出してくれる。

良かった、変な声も2人で出せば恥ずかしくない。

グジュっ、ぬるっ、グチュっ、ぐじゅっ！ぶしゃっ、プシッ！！

あ、あああ、こすり合わせるマンコから、2人分の愛液がお漏らしみたいに出て……

「もう、イク！」

「ええ、わたくしも！」

プシュッ……！！！！

「「ああーん！！！」」

最後に盛大に愛液を噴き出し、私たちは果て、ギュッと固く抱き合った……

「はあ、はあ、はあ、はあ……んはあ……」

「はあ、はあ、はあ、ふう、はあああ……」

私たちは熱い吐息を吐きながら、抱き合ったまま見つめ合い、キスをして……

「王女さま、愛してますわ……」

「うん、私も……」

16 話 婚前交渉翌朝～2つの“おめでとう”～

翌朝……

チュンチュンと、スズメの鳴き声が聞こえる……憧れの朝チュンだわ。
それをリリイと迎えられるなんて、夢みたい。

さて、そのリリイは……
可愛い寝顔、静かな寝息、起こすのが惜しいくらいだ。

とはいえ、まだ結婚前。
メイドが来て大事になる前に身支度を整えなきゃ。

時計を見ると、朝 5 時。
メイドが来るのは 7 時くらいだし、まだ外も暗くて充分間に合……

バン！

おなじみの「NO ノックドア開け放ち」で女王登場！？

「おはよう、王女…ってえええええ！？？」

女王が驚くのも無理はない。

全裸の私とリリイ、ぐちゃぐちゃのベッド、愛の証たっぷりのシーツ。
まさに事後の現場。

「じょ、女王さま！」

女王の驚き声に、リリイが飛び起き、そして目を白黒させる。

「これはこれは、娘に朝の挨拶をしに来たら、リリイではないか。」

「ず、随分早いのね？今日に限って……」

言い訳しても仕方ないので、私は女王に今日の早過ぎる来訪について聞いた。

「たまには朝活も良かろうと思って……この状況に鉢合うとは思わなかったが。
そしてこれは…完全に事後の翌朝、だな。」

「も、申し訳ありません、女王さま！このようなことをしてしまって！マンコ疼き過ぎて我慢出来なかったのですわ！」

「リリィ！女王にマンコとか言わないで！？」

私は別の意味で頭がクラクラした。

「婚約解消はもちろん、実家に取り潰されても文句は言いませんわ！」

リリィがガバッと手をついてひれ伏す。

女王は腕組みをして聞いていたが……

「ん～……別に構わぬが？特に咎めるつもりはない。
不同意ならともかく、お互い普通に同意していたんだろうし……」

な、なんだ……別にいいなら、腕組みして深刻な話っぽくしないでほしかったな。

「ご、ごめんなさい、お母さま……」

でも一応私も謝っておいた。

「しかし結婚前にやったことが周囲にバレると少々面倒なことになる、こういうところ王族は面倒なのだ。
これはもう今日から手続きをはじめて、すぐにでもリリィを正室として迎え入れねば。」

……そんなわけで、特にお咎めなく、私とリリィは結婚が確定した。

あ、なんだかんだで正式プロポーズをしてないから、今日の夜にでも、仕切り直さなきゃ。
指輪も買ってあげたいから指のサイズと希望のブランドを聞いて……

「ぎゃひいいい！！！！」

「へ！？」

「は！？」

指輪のことを考えていた私は急に奇声を上げた。
リリィと女王は腰を抜かした。

何故なら、自分が座っている位置のシートに、血がベツトリ！
しかも出所は……オマンコの、割れ目！？

「ど、どうした、王女？」

「お、お母さま！私病気だわ！だって、割れ目から血が！止まらなくて！」

私は拭いても拭いても止まらない血にパニックになる。

「え、あ、ああ……」

「あら……これは、ですわ……」

だが女王とリリィは妙に落ち着いていた。

それに私もショックが過ぎ去ると、おや、と思った。
割れ目から血が出てるのに、そもそも怪我してないし、別に痛くもない……これはもしや？

「普通に生理じゃないか。」

私が思っていた言葉を、女王が言った。

「お前を女体化させて、なんだかんだで4ヶ月。
その間生理になってなかったから、もしかしたらこのままならないのではと思っていたんだが……」

子供を作る時は、女王のふたなり魔法で私を一時的にふたなりにして、お相手(リリィ)に妊娠出産してもらう……ということで決まっていたので、私が女性としての生殖能力がなかったとしても困らないという話にはなっていたが。

でも、ちょっと安心した。
ならないよりは、なったほうがいいし。

「まあ、とにかく、身なりを整えなさい、メイドにナプキンを持ってこさせるから。」

「え、でも、付け方とか全く分からないよ……」

「それは、お前の嫁に教えてもらえばいいだろう？」

そう言ってリリィを見る女王。
リリィははにかんで会釈した。

「おめでとう、2 人とも。王女は、2 つの意味で。」

17 話 子作り予行練習～おかえり、(ふたなり)ペニス～

あれから 1 週間……

私とリリイは何事もなかったかのように(清い交際しかしてなかったかのように)入籍を済ませていた。

リリイの名前も「リリイ・アルタシア」から「リリイ・セレス」に変わり、嫁の苗字が私と同じになったことで、「私が娶った感」がマシマシ♪

指のサイズと希望のブランドを詳しく聞いてから、気に入ってくれそうな指輪もプレゼントした。
嫁ははしゃいで「一生大事にしますわー！」と飛び上がってくれた。

ちなみに入籍当日の夜は……

私は生理 4 日目で、茶ばんだ血とおりものが混ざったものが少し出ていた。
この状態で性行為はちょっと……ということで、何もなかった。
なんとも色気のない“結婚初夜”だったが、こればかりはそれこそ生理現象だから仕方ないね。

……………

「あ、あのう……」

夕食後、お風呂に入る前に部屋に寄ったら、リリイが椅子に座ってモジモジしていた。
これは、夜のお誘いかな？

「お風呂入ったら目を通さないといけない書類があるんだ。サッサと済ませてくるから、待っててね♪」

「は……はい……」

「ん、なに？ 結婚したんだし遠慮はナシだよ。」

「え、ええ……では、言いますわ。
あの……子供を作る時は、女王さまに王女さまがふたなり魔法をかけていただいて、わたくしの中に射精すると聞いています。」

正室としてさっそく世継ぎのことを考えてくれているのは感心、するけど……

「えっと……そうだけど、結婚して 1 週間だし、私たちまだ 20 才だし、当面はいいかなと思ってるんだ。私は王女になって日が浅いから、学ぶことが色々あって、それどころじゃないっていうのもあるし。」

「わ、わたくしも、まだいいと思ってますわ。」

「ん……？ってことは……？」

「子供のことは全く別に、普通にふたなり状態で、抱いていただきたいのですわ！」

リリイは顔を真っ赤にして、ハッキリ言って、俯く……

「あ、ごめん！ 察せなくて……！ うん、私も、ふたなり状態でのセックス、してみたいな！」

「良かった、では……！」

「うん！ じゃお風呂終わったら、女王に魔法かけてもらってくる！ 思いっきり楽しんじゃお！」

「ええ、お願いいたしますわ♪」

しかし……ううううう……

お風呂を終えた私は、女王の部屋の前に立ち尽くしていた。

頼まないといけないんだよなあ、女王に……恥ずかしい！

私はドアをノックしてから、女王の部屋に入った。

そして上記の旨を、恥じ入りつつ、女王にお願いした。

「ははは、そんなことお安い御用だ。」

女王はからかいもせず、言ってくれた。

「ありがとうお母さま！」

「ああ、豆知識だから忘れてくれてもいいが、厳密にはふたなり魔法とは同じ系統だけど違うものを使う。」

「え？」

「女性を一時的にふたなりにしたい場合は、『ふたなり魔法』だ。

元々存在しないものを一時的に新規増設するわけだから、形や大きさもその時その時で、ランダムだ。

でも元男性の TS 女性を一時的にふたなりにしたい場合は、『ペニスに帰ってきてもらう魔法』を使うのだ。

元々存在していたものを復活させるわけだから、形や大きさは元々のものの固定で変えることは出来ない。」

「はー、なるほど、勉強になる。」

「ではさっそくゆくぞ……魔法の正式名称は、『陽性還元:セレス・マスキュロ・リジェネ』！」

キィィィイン！

「わっ！」

金属音みたいなのが鳴ったので、一応わっと言ったが、別に痛くも痒くもなかった。

ただ、私の割れ目が急激に熱くなる。

そして熱くなったところから、木が枝を伸ばすように、グングンと懐かしい感覚が……！

私が着ていたネグリジェのスカートを持ち上げ、履いていたパンティも押しのけて……！

「きゃー♪」

4ヶ月前まで股に存在していた重くて大きいものが、そこにあった。

しかも、いますぐ戦場に出れるぜと言わんばかりのフル勃起での登場……いや、再登場だね。

「ん、どうした王女、なんだか喜んでないか？」

「うん、今のこの姿と性別のまま、ペニスにだけ再会出来るのは悪くないなって。」

「ふむ、そうか。ちなみにそれは 10 時間後にはまたお前の 1 番奥に帰るからな。」

「“消える”んじゃないくて、“帰る”んだね。」

「そうだ。それにしても……」

自室に行くため背を向けようとする、女王は私のご立派なモノを、ジッと見ている。

「やだ、そんな見ないでよ。」

「はは、すまん、でも、お前のペニスを直接見るのは初めてだが、なかなかのものだな。」

「まあ、ムキムキゴリラだったから、それに比例していた感じね。」

私はパンティの中にペニスを仕舞おうとしたが……

んんん、無理だ、ビヨンと飛び出て、パンティが全く意味をなしてなくて、恥ずかしい。

これはサッサと女王の視界から消えねば。

そう思い、私はお礼を言ってから、そそくさと退室し、早足で自室に向かった……

18 話 子作り予行練習～ふたなりセックスで私脱童貞、嫁処女喪失～

私は自室に帰って、パタンとドアを閉める。

「おかえりなさい、王女さま。それで、魔法のほうは……あらあら～♪」

どうだったか聞くまでも言うまでもなく、私のふたなり(元々自分のだが)ペニスは、ネグリジェの中でビーンと反り勃って、自己主張していた。

「まあ～ネグリジェのスカートを思いっきり持ち上げていて、どんなのが出てくるのか楽しみですわ～！」

「あはは、それじゃお互い裸になろうか？」

「ええ！」

ゴソゴソ……

お互いネグリジェとブラジャーとパンティを脱ぎ、生まれたままの姿になり……

「やーん！王女さま、そちらのおペニス、本当に大きくて長いですわね！」

「恥ずかしいわ。それで、手コキってやつ、お願いしたいんだけど。」

「はい、やりますわ！」

リリイが小さな右手でペニスの上半分を軽く握り、左手で補助するように下半分を軽く握る。
続けて手のひらと指で、にぎにぎとしてくれる。

「あ、いい、そのゆるやかな感じ！」

「うふふ、コキコキコキコキ～なんちゃって～どうですか～？」

「やん、いい、それ気持ちいい！」

「まあ、可愛い。あら、これは何？」

鈴口をリリィがツンとつついてきて、そこになんとも言えない刺激が走る。

「はひっ、つつくの駄目！」

「ペニスの先っぽに白い液体が滲むように出ていると思ったら、精子ですか？もう射精なさってるの？」

「射精と言えば射精だけど、一応先走りと言って、本格的な射精ではないと言うか……あっ。」

クチュ、クチュ、くちゃ、くちっ、クチュ、クチュ……

リリィがゆっくりとペニスを握った手を動かす。

「あ……あ……おおん……駄目えん……」

「駄目って言われたら、イカせてさしあげたくりますわ。ちょっと力入れてみましょうか。」

クチュクチュクチュクチュ！

「握る」のが「こする」になり、リリィの手が卑猥な音を奏でる。

「きゃ、駄目だって！」

「シコシコ、シコシコ、シコシコ、おペニスシコシコ♪」

グチュグチュグチュグチュ！

リリィの手の動きが加速する。

「あは、王女さまのおペニス膨らんできましたわ、精子出してみてくださいな！」

「ひあ、あ、あ、精子出ちゃう、きゃあああ！」

ビュツ……！

私は射精してしまった。

噴水のように噴き上げて……は、恥ずかしい！

ペニスから噴き上げた精子はリリイの手にかかっている。

「ごめんね！」

私は慌てて、ティッシュでリリイの手を拭く。

「あらやだ、どうして謝るんですか？」

「だって手にかけちゃって……」

「ふたなりエッチしてるんだから、精子がかかるのは当たり前ですわ～それより、おペニスのご様子は？」

“おペニスのご様子”は壮健のようだった。

今さっき出したばかりなのに、精子が竿に充填され膨らんで、先走りが早くも滲んでいる。

「それでは、パイズリをしましょうか ♪」

「え、本当？」

「もちろんですわ、この H カップになりかけの G カップバストを使わない手はありません？」

「そ、それじゃ、ベッドに寝て。」

「はい！」

まずはリリイをベッドに仰向けに寝させて……

リリイのマシュマロみたいに柔らかい両胸を、両手でモミモミ。

「あ……やん……くすぐったい……」

リリのオッパイ、触るだけでふたなりペニス元気いっぱいになる……下の割れ目もねっとりしだしている。

私は、リリの両胸の谷間の間に、ガチガチのペニスを、そっと差し入れた。

肉棒はすっぽりと彼女の胸におさまり、亀頭だけがコンニチハした。

「やん、なんだか面白いですわ。」

「あは、そうだね、じゃ動いてみるよ。」

ズリュツ……

腰を引いて戻し……

ズリュツ……

ぬるっと滑りながら、すぐに根元まで入り込む。

私たちの汗なのかどうなのかは分からないけど、リリの肌は湿っていて動きやすかった。

また腰を引いて、谷間に押し込んで……

にちゅ、にゅる、にちゅ……

谷間の中で肉棒が、湿り気のある音を鳴らしていた。

「あん、エッチな音♪」

私はオッパイの中で、前後に揺らすことを続けた。

「ん、はぁ、はぁ、んっ、おペニス、熱いですわ……また立派な竿が膨らんでおられて……」

私は両手で両胸を寄せて、ペニスを強く挟み込んでみた。

ヌチュツという音と共に、乳肉の圧を感じる。

あ、駄目、乳肉にペニスが潰される感じで……！

谷間に埋まるペニスがビクツと跳ねたと思うと……

ビュグッ！！

「きゃっ！」

「あん！」

胸の中で、急に射精した。

こ、これはもしや、暴発ってやつなのでは……

恥ずかしい、経験不足丸出しだわ！

私はゆっくり胸からペニスを抜く……

「うわああ、精子でドロドロ……」

「本当ですわ、気持ち良くなっていただけたのですね。」

「もちろん、ありがとリリィ。」

「こちらこそですわ。あ、2回出したからそろそろ難しいでしょうか……」

私はズイッとペニスをリリィの鼻先に突き付けてあげた。

「あらあらまああ～♪」

2 回出したにも関わらず、私のペニスはフル勃起を保ち、臨戦態勢だ。
サッサとマンコ寄越せやと言わんばかりに、別の生き物のように、時々ビクッと動く。

「リリィ、えっと、いいかな……？」

「もちろんですわ……」

何がいいかなんて野暮なことは聞かず、リリィはベッドに仰向けに寝て、足を開いて、マンコ丸出しにしてくれた。

そこはネットに濡れていて、匂い立つようで、サッサとチンコ寄越せやと言わんばかり。

まずはマンコの割れ目に、指を這わせる。
見た目の通り、ぬるぬるで熱くなっていた。

触るたびにクチュクチュという音がリリィのマンコから鳴る。

「ん、ねえ、おペニス挿れて下さいな……」

指でいじっていると、リリィがそう言う。

「え、でも、あまりマンコに前戯してないけど、大丈夫？」

「ええ、手コキとパイズリでオマンコ発情済みです、挿れてほしいの、わたくしの処女膜、破ってえ……」

—私はたまらず、嫁の処女マンコに、挿入開始した。

「あぁっ、痛い……！」

リリィは痛そうに苦痛の声を上げた。
そうよね……初めてで、こんなデカチンなんだもの、痛くないわけがない。
可哀想になり、続けていいのか迷う。

「大丈夫……です……」

「本当に大丈夫？一旦抜いてまたの機会にしようか。」

「そんなこと言わないで！おペニス奥まで挿れて、ちゃんと最後までしてほしいの！」

リリイがそんなに言ってくれるなら……私はゆっくりと嫁の処女マンコの中に侵入していく。

グジュ……ズグツ……

「あう、う……くう……！！」

リリイは涙している。

強い痛みを感じているんだ、でも中止を恐れて痛いとは絶対言わずに。

彼女の頭を撫でたり言葉をかけたりして、休み休み、ペニスを胎内にうずめていき……

「ああああああん……」

遂に、リリイの奥までペニスが到達した。

ああ、これが女性の中……とてもあたたかくて、切なそうにキューキューと締め付けてきて。

「リリイが頑張ってくれたおかげで、ひとつになれたよ。」

「嬉しい、痛みなんて吹き飛びました……」

ギュッと抱き合って、キスした。

「ん、チュ……嬉しい……」

その体勢でしばらく過ごして……

ああ、私のふたなりペニス、リリのマンコの中で暴れるようにビクビクしてる。
早くマンコ突かせろと言わんばかりだ。

しかし処女を失ったばかりで絶対痛いのにこんなデカチンで突くなんてそんな暴挙……

でも……！
本能でどうしようもなく、私はゆっくり、ペニスが抜ける寸前まで、腰を引いた。

「あっ！」

声を上げるリリを尻目に……

ズズツ……！

ゆっくり、1 番奥まで押し込んでみる。

「やああん……」

また抜ける寸前まで腰を引き、奥に入れ……ゆっくりペニスを往復させる。

「ん……王女さま、熱い、出し入れされてるところ、熱いの……！」

「ごめんリリ、痛いだろうに、我慢出来なくて。」

「いいの！ 我慢しないで！ もっと、グボグボって、出したり入れたり、して下さいまし！」

そんな言葉を言われ、私の理性は崩壊した。

リリが気が変わっても絶対逃げられないように、両手で彼女の腰をガッシリ掴み……

パン、パン、パン、パン！

大きく膨らんだペニスがグチョグチョのマンコを突く卑猥な音が響く。

「あん！王女さま！それ、やっ！あ、あ、あ、あ！」

リリが無意識に逃げるような動作をしたので、捕まえた手を離さず、しっかりマンコを突く。

「あ、あん、はあん、だめ、だめえん！やああ！めええん！！」

「今更駄目って言っても、遅すぎるよ！マンコ突くからね！」

「駄目ええ！もう突いちゃいや！だって、あつ、こんな、オマンコ変になりそうで！」

リリの体の中で、ペニスは風船のように膨らむ。

射精直前だというのは、自分で分かった。

バン！バン！バコッ！バコッ！バコッ！

「お、おおおん、だめえん、もういやああ、だめなのおお。」

結合部からは大きい音が鳴り響き、お互いの体液でドロドロになっている。

リリはヨダレを垂らして、嫌と駄目しか言えない人形のようにになっている。

そして私のペニスが、リリの中を引き裂かんばかりに膨脹したと思ったら……

ビュー————！！！！

「ああああん！！！」

「んはあああ！！！」

絶頂を迎え、私は大量の精子を、リリの中に吐き出した。

「……はあ、はあ、はあ、はあ、あああん……」

「ん……はあ、はあ、んはあ……ああ、はああ……」

ふたりで繋がって抱き合ったまま、しばらく放心してから……

私は慎重にゆっくりペニスを抜いてみた。
入り口のところで少し引っかかったが、チュポツと抜けた。

「あはぁん……」

リリイのマンコから中に出された精子がトロトロと垂れた。
精子と一緒に、破瓜の血も一筋……

「嬉しいですわ王女さま……非処女にさせていただいて、またひとつ成長しました……」

「こちらこそ頑張って受け入れてくれてありがとうね。子作り予行練習は成功かな？」

「ん～予行練習ではなく、いきなり実践になってしまいましたけどね。」

「あ、本当だ、普通に中に出しちゃった……」

さすがに疲れた私たちは、体を拭き合って、パンティを履き、ネグリジェを着て、ベッドに入る……

「……また、子作りとは関係なく、ふたなり状態でしていただけますよね？」

「もちろん。また近いうち……」

ハタと思い浮かぶ。

このふたなり状態になるには、女王に頼んで魔法をかけてもらうことが必須だ。
すごく恥ずかしい、自分で使えるようにならないかな、あの魔法。

……今度、女王にこの魔法を教えてもらえないか聞いてみよう。

19 話 いわくの姫君襲来のお知らせ

それから3週間後の昼……

私は女性としての所作、学問を深め、王女としての立ち居振る舞いを日々学んでいる。
リリイとは結婚して1ヶ月経ち、毎日仲の良い新婚夫婦だ。

私は珍しく、今日は何も予定がない。
リリイは美容院に行っていたので、私はひとりで紅茶を飲みながら読書を楽しんでいた。

バン！

おなじみの「NO ノックドア開け放ち」で女王登場。

「今日もいい天気だな、王女。」

「うん、そうね。」

……あ、そうだ。
あの魔法のことを聞きそびれて聞いてなかった。
せっかくだから聞いてみようかしら。

「お母さま、例の『ペニスに帰ってきてもらう魔法』だけど……」

「ん？ 今夜かけてほしいのか？」

「あ、今日はいいんだけど、あれって自分で使えるようになれるのか聞きたくて。」

「ほほう、私にいちいち頼むのが恥ずかしいってわけだな？」

「まあ、そんな感じ。」

女王はふっと笑って、椅子に座った。

「基本的に魔法は女性しか使えない特権だ。
それに加え、生まれつき魔力を持っている女性であることが前提。」

元男性の私が魔力を持ってるわけないし、無理……ということか。
私は理解して……

「そっか、分かった、じゃまた近いうち頼むと思うから……」

「でもな、お前の体の奥に、『魔力の芽』のようなものを感じるのだ。」

「え、ほ、本当？」

「最初は気のせいかと思っていたが、お前がここに来て以降、それがわずかずつ膨らんでいる気がする。
もしかしたら女体化の過程で私に似るついでに、魔力もちよっと移ったのかもな。」

それが本当だったら、嬉しい。
リリイとも結婚出来たし、女体化していいことばかりだ、こうなって良かった！

「でも『ペニスに帰ってきてもらう魔法』はかなり難しい。
まずは簡単なかすり傷を治す程度の回復魔法を使えるようになってみろ。
魔法講師を手配しておこう。」

「うん、ありがとう！楽しみだなあ！」

こうなれば居ても立っても居られない。
さっそく図書館に行って、魔法の本を読もう！

——が、その時。

「それよりも王女。」

歩きかけた私を、女王の一言が止めた。

「どうしても断れない筋から頼まれて、側室希望者とお見合いすることが確定した。」

「……え？」

頭の中で、何かが音を立てて割れた。

「……えっと……私、側室欲しいなんて一言も言ってないし、そもそもリリィが居るんだけど！？」

「うんうん、そうだよな、誰であろうと嫌だよな。」

「断るわよ、そんなの。」

「うんうん、そうだよな、断るよな。でも、残念ながらお見合いは確定したのだ。」

「えー！？」

仮にも TS 女王国の王女である私が拒否権なし……

ってことは、相手は私と同格か、それ以上の身分の人？

それなら他国の王族以外あり得なかった。

でも、私がもう正室をもらってるのを知らないはずないでしょ？

なのに側室希望って……どういう経緯と神経なの。

……あ！ 恐ろしいことに気付いた。

それってもしかして、男性！？

他国の第 2 王子とか第 3 王子とかなら、充分あり得る！

そしてそれはやだ！ 私はどうしても女性じゃないとそういう目で見れないのよぉ～！

「……とにかく、その相手の、国と氏名は？」

「マウスバリー王国、第 2 王女、クリス・マウスバリー王女殿下だ。」

マウスバリー王国は、思いっきり隣の国！

そんな手近なところから、襲来すんな！

隣の国のことは、さすがに一般知識として知っている。

国王夫妻には 2 人のお子様がいる。

第 1 王子、ユリス・マウスバリー王子殿下。

第 2 王子、クリス・マウスバリー王子殿下。

……ん？

さっき女王は“マウスバリー王国、第 2 王女、クリス・マウスバリー王女殿下”と言った。

「え、それって……第 2 王子とわざわざ同じ名前を付けられた非公表の女の子がいるってこと？

しかも第 2 王女ってことは、第 1 王女も居るはずよね？

どうなってるの、マウスバリー王国……」

女王は肩をすくめる。

「私も何度も追及したのだが、相手側は“第 2 王女”としか言わない。

真相は不明だが、昔からウチに張り合ってくる国だし、過去に技術を盗まれたこともあるからな。」

まるでなんでもないことのような口振りで言う女王に、私は半眼。

「ひどいわねえ、ひとごとだと思って。」

「まあ、確定しているのはあくまで『お見合い』だからな。

お見合いから 1 週間以内に、片方もしくは両方が拒否の意思を示したら、この話は破談になる。」

「なんだ！ お見合いの拒否権はないけど、結婚の拒否権は普通にあるのね！」

だから女王は何でもないことのような顔をしていたのか。

良かった、私がどうでもいいとかじゃなくて。

「まあそういうことから、“クリス・マウスバリー第 2 王女殿下”とお見合い、よろしく。」

「ええ、分かったわ……そのお見合いはいつ？」

「明日だ。」

「やっぱり明日かああああ！！！！」

20 話 クリス・マウスバリー

翌日……

例のお見合い相手、クリス・マウスバリー“王女殿下”が、ウチの王城にやってきた。
私はいつも通りの自前メイクと、紫のシンプルなドレスで、やる気なく迎える。
自分が熱烈希望してお見合いしてもらったリリイの時とは、まるっきりワケが違うのだから。
女王に至っては、このお見合いに同席すらしていなかった。

ちなみに、先方には私の事情は伏せている。
勇者の妹は架空の存在で、私こそが女体化して王女になった勇者本人だということは。

それが原因で破談になっても、私は何も困らないし。
女王も『向こうから押しかけてきてるのだから言う必要はない』と言ったので。

連れてきたのは、クリス王女の兄、マウスバリー王国第 1 王子、ユリス殿下。
彼がまず口を開いた。

「……こんにちは、ティアリーノ王女殿下。」

金髪、青い目、青い礼服、「王子さまですが何か？」と顔に書いてあるような容姿。
年齢は、私より 2 才上なので、22 才のはず。

「こんにちは、ユリス王子殿下。」

ユリス殿下とは、今まで 5 回会っていた。
なので「こんにちは」という挨拶になる。
5 回会ってはいても、全く親しくないし、赤の他人だけど。

最初の 2 回は、勇者時代、私の性別が男性だった時。
女王に社会勉強として、会食や王族の集まりに護衛として同行させてもらったことがあって、居合わせたことがあった。
後の 3 回は、私が王女になったあとで、会食やパーティで会ったので、挨拶だけした。

「そう言えば……ティアリーノ殿下、お兄さんは元気ですか……？」

ユリス殿下が、何うように聞いてきた。

お兄さんとはもちろん、勇者時代の私、ティルバートのことだろう。

私は設定上は『ティルバートの妹』なのだから。

「元気です。」

私はぶっきらぼうな短文返答で、これ以上は答えませんアピールをした。

この短文返答は、不機嫌な時に出る、男時代の癖だ。

男時代の癖や影は消さないといけないのだけど、どうにも直らないものがいくつかあるようで。

ユリス殿下は、あなたが本人だと察してますと言いたいのか。

でもだから何よ、面倒くさいわ。

「……それより今日は、妹とお見合いを承諾していただいてありがとうございました。」

私が聞いた時には確定していたので承諾はしてないんですけどね。

そう心の中で言うが、口に出すほど私も幼くはない。

「我が妹ながら、可愛くて勉強にも励んでいて、ティアリーノ殿下にふさわしいと思うんです。

こらクリス、いつまでも床ばかり見てないで。」

ずっと黙って床を見ていた『妹』が、ようやく顔を上げて、私を見る――



クリス・マウスバリー。

肩までの金髪をハーフアップにして大きな青いリボンをつけている。

青い目、小柄、青の肩出しドレス、「お姫さまですが何か？」と顔に書いてあるような容姿。

年齢は明らかに私より下だろう。

「はじめまして、ティアリーノ王女殿下。
マウスバリー王国の第2王女…クリスです。」

彼女は落ちついた第一声を発した。

見た目も声も、完全に少女。
顔もだが、谷間の主張が激しい胸を見れば明白。

「側室としてご検討いただくことになり、恐縮です。以後よろしくお願いいたします。」

「はぁ……よろしく……」

こうして、モヤモヤはあるが、感想は特にないお見合いが、終わった。

21 話 淫らなおねショタ手コキで暴いた正体

感想がないお見合いから3日後……

もう1度会って、片方もしくは両方が拒否の意志を示さなければ、結婚……という話になっている。
そして拒否権はいくらでもあり「嫌です」と言えばそれで終了だ。

でも、結婚の拒否権はあるが、お見合い後にもう1度会うことの拒否権は、ない。

そして会う日は今日だ。

私は、いつも通り自前のメイク、白のブラウスと薄紫のスカートという恰好で、クリス姫を迎えた。

時間通りにやってきたクリス姫は、胸元にリボンが付いた青色の肩出しミニスカートワンピース、白のニーハイソックス、青いパンプスという女の子らしい装いをしていた。

まあせっかく会うのだし、冷たくしたいわけではない。

その場だけでも楽しんでもらおうと、私はアフタヌーンティーを用意していた。
リリイとの時も好評だったし、女の子はこういうおもてなしを嫌わないことを私は知っている。

モヤモヤはあるが、クリス姫の事情を探るつもりはない。
どうせ結婚は断るのだから、詮索するのは野次馬だろう。

私は元勇者のTS王女であることを伏せたまま。
クリス姫も自分の事情を明かそうとしない。

お互い言わず聞かずで、会合したという事実を作るための無難な会話をしている。

「クリス姫、いかが？ そのチョコケーキはウチのパティシエの自信作よ。」

「ええ、甘くて美味しいです、このゼリーも。」

「甘い物ばかりだと胃がしんどくなるわよ、生ハムを召し上がって。」

「はい……あ、これすごく美味しい。」

この会合は、最低でも 1 時間はしなければならない。
クリス姫が来て、30 分経っている。

あと半分かと思いながら、つまらない会話をしていた、その時――

姫がパッと、両手で口を押さえた。

「……う、す、すみません、ちょっと……まだ時間ではないですが、帰ります。」

一瞬、早く帰りたいから急に気分が悪くなったフリをしてるのかなと思ったが……
顔色が悪く、変な息で、本当に体調が悪くなさそうで……

「……医者と呼ばわ、待ってて。」

「いえ、呼ばれたら困ります。病気とか体調不良ではなく……」

「駄目よ、そんな顔色で……え！？」

――突然、部屋に閃光のような光が走った。

うわ、まぶしっ……思わず目閉じる。
一体何が起こってるというの！

そして、私が目を開けた時――



クリス姫の姿が消えている。
そして入れ替わるように、クリス姫にそっくりだけど髪だけショートカットの人が居た。

「うわ！最悪！見られちゃった！」

あんなに大きくて谷間の自己主張が激しい胸は、まな板になっていて、胸元はすっからかん。
声もちょっと低くなっている。
でも身長は相変わらず私より低くて、顔は変わってないけど……

「随分クオリティの高い女装だったわね。
どういう事情なのか、なんで急に女装を辞めたのか、謎の光を発したのかも知らないけど。
とりあえずあなた、クリス姫は架空の存在で、第2王子のクリス殿下ね。」

「い、いえ、これは、その……」

「ウダウダ言わずに直立して！」

私が鋭い声を出すと、クリス王子はその場に直立した。

「スカートを自分でめくってパンツを見せなさい。」

「なんで？」

「いいからめくる！」

「そんなぁ……」

クリス王子は顔を真っ赤にして、ミニスカートを自分で上げた。

そこにあったのは、リボンをあしらった可愛いピンクのパンティ。

「あら、かつての私みたいに、ダルダルで色褪せた男物トランクスを履いたりはしてないのね。」

「……やっぱりあなたも女体化女性……ティルバートさん本人だな。」

「そうよ、だから何？」

私は文字通り、上からクリス王子を見下ろした。

「私は本物の女性になり、綺麗に装い、立ち居振る舞いを学び、王女として生きているわ。あなたみたいな女装で誤魔化して伏せてコソコソしてる半端者とは格が違うのよ。」

「私も女装ではありませんけど。あ、今は女装か。」

「とりあえず男か女かはハッキリさせないと。」

私は有無を言わず、丸出しにさせているピンクのパンティをいきなり下ろした！

「え、嘘……セクハラとか通り越してる！」

パンティを下ろされ、わめくクリス王子のお股には……

「あらやだ、お股に、女には絶対ないものがあるんだけど、これなーに？」

私の男時代のデカチンとは比較にもならない可愛いチンチンがあった♪

「これもフェイクかもしれないし、確かめるわね…つん、つん。」

私は、その小さいものを、優しくツンツンしてあげた♪

「うあ、それ駄目。」

駄目と言いながら、クリス王子は顔を赤らめ、内股でモゾモゾ。

「チンケな租チンのくせに、ツンツンしただけでバッチリ反応して。
その上小さい租チンの後ろに隠れるように小さい金玉がある、なにこの租金玉（そきんたま）。」

「チンケな租チンで租金玉とか言わないで！
王女殿下だって元は男なんだから言われたら嫌って分かるでしょ！？」

「私男時代は規格外のデカチンで、金玉もずっしり巨大で、童貞だったくせに何故かズル剥けで、自分でも気持ち悪くて嫌だったの、これなら租チンのほうがマシと思ってたわ。
だから租チンを褒めてたつもりだったんだけど、裏目に出たならごめんなさいね。
お詫びに上下にさすってあげるわ、ほら、ほら、ほら……」

詫びではなく、私がそうしてやりたいからしてるだけだが……

「はぁ……あぁ……くぅ……あ……あぁ……」

「ちょっとさすっただけで、もう顔がとろけて、鈴口に先走り、滲ませちゃって。
ついでに塗り伸ばしといてあげるわ、ん……」

クチュクチュ……クチュクチュ……

「ああん、塗りのばしながら、先っぽツンツン、だめえ♪」

「私をこんな猿芝居に付き合わせた罰よ。いくところ、見せなさい。」

クチュクチュクチュクチュ！

私は手の動きを速めてやった！

「うあああ、も、もう、駄目、それやめて、いやああ。」

「うふ、小さい金玉膨らんできた、精子出しなさい☆」

「ひあ、あ、あ、精子出ちゃう、だめええ！！！」

ビュツ……！

クリス王子は射精とイク顔を見せてくれ、私はうふふと微笑った(わらった)。

22 話 私はひとりぼっちの TS 姫のために決意する

手コキ事件より 20 分後……

私は、クリス王子が落ちついたのを確認してから、切り出した。

「あなた男だったなら、最初からそう言えば良かったのに。」

「いえ、男ではない、です、今は。」

「え……男じゃなかったら、何？ 今見た租チンと射精は私の幻だったのかしら。」

「生まれた時は男、王子でしたが、女体化薬を飲んで、女になった者です。」

……女体化薬！？

私はビックリして椅子から立ちそうになって、座り直す。

「そんなものがこの世に……マウスバリー王国には存在するの？」

「はい、5 年前に……私の兄が、貴国にスパイを侵入させて、盗んだんです。

女王殿下が一生に一度しか使えない禁術《王女化転生：プリンセス・リジェネレーション》のことを書いた TS 王家禁書を。

証拠はなく犯人不明扱いなので、貴国から訴えられていませんが、犯人は兄です。」

「え、仮にも王子が窃盗……そして女体化薬の出所は、ウチ！？」

女王が『マウスバリー王国はウチの技術を盗んできた』と言っていたが、そのことだったんだ！

「どうして盗んだの……？」

「女体化薬を作って商品化して財を得るのが目的です……

ウチは貧しい国で、王国なんて名ばかり……兄は追い詰められていたので……」

私は痛む頭を押さえながら……ふと気付く。

「盗んだところで、ウチの女王が一生に一度しか使えない禁術を商品化なんか出来るわけないでしょ……」

「そのはずだったんですが、恐ろしく天才の科学者が居まして。
その盗んだ書物から研究して、5 年かけて、試作品を、本当に作れてしまったんです。
しかも、動物実験の結果、本当に性別が変わりまして……」

嘘のような話に、私はますます頭痛が増す……

「でも、副作用も多く、飲んでもすぐ元の性別に戻る個体も多く、商品化は困難で……
そうこうしているうちにその科学者が亡くなったので、正式に開発中止になりました。
彼が亡くなる前に作った試作品は破棄された、はずでしたが……」

「……破棄されてない薬があったの？」

「はい、2 つだけ、何故か父が保管してまして。」

「それを、まさかあなたが？」

「はい……父に飲まれたんです。
『王位を継ぐのはユリスで、第 2 王子のお前は余り者なんだから、金持ちに嫁いで金を流せ』『居ても居なくてもいい存在なんだから少しでも役に立て』などの暴言で責め立てられて。」

私の心臓は「父」「暴言」というワードに反応してズキズキした。
クリスへの同情より、私自身の心の古傷が傷むからだ。
私と母への暴言と暴力で、勇者の責務を全て押し付けてきた、亡き父を思い出す。

「……薬は適応したのですが、さっきのように急に男に戻ったり苦しくなったり不具合が多いです。
戻るのは 1 日に 1 回程度ですが、時間の予測は全く出来ず、急に変わるのです。」

私はズキズキする胸を押さえつつ、ふと思った……
クリスに悲壮感も被害者意識も特にないのが気になる……

「あなたは……それを飲むのが嫌ではなかったの？」

「暴言で責め立てられて飲まされたのは、嫌でした。

でも、第2王子の私は余り者、これは事実。

それに、元々女性に憧れもありましたし、性別が変わることは別に嫌じゃないんですよ。」

そう言いながら、クリス王子は胸を押さえた。

押さえている胸は、少しずつ膨らんできている。

「あ……女性になりそう……とっくに1時間過ぎてますが、変化が終わるまで、ここに居させて下さい。」

私は、なんとか出来ないだろうか考えた。

性別が体調不調を伴いながら不定期に変わるのは、本人がつらすぎるだろう。

しかもいつ変わるか予測も出来ないなら、公の場には出にくいし、生活の安定が著しく低下してしまう。

男でも女でもいいから、どちらかの性別に確定させてあげられないだろうか。

「……あっ！私が魔法を頑張って習得するわ！

即位したあとになるけど、例の《王女化転生：プリンセス・リジェネレーション》を、あなたに使ってあげる！」

「大変ありがたいのですが……マウスバリー王家は全ての魔法を無効化する特殊体質なのです。

王女さまが習得されてそれを使ってくれたとしても、私には効きません。

理論上、私の性別は、一生、不定期に変わることが避けられません！」

そう言って、クリスは涙を浮かべた。

その時には、元の……いや、元ではない、薬の効果である、女性になっていた。

リボンは外れていたが、髪は肩まで伸び、大きな胸がそこにある。

「すみません……でも大丈夫です。王女殿下には関係ないことですし……」

クリスは大きくなった胸を押さえて言った。

「そ、それに、私は王女さまに結婚を断られても、大丈夫なんですよ。」

急にクリスが明るくなる。
強がっているようにしか見えない……

「でも私、こんな事情を聞いて『そうですかさようなら』とは、とても……」

「モルド・サルベリ公爵閣下が『役立たずのクリスを、このワシが引き取ってやっても良い』と突然通達に来られたのです。

閣下は桁外れの資産をお持ちの、有名な大地主です。
だ、だから、王女さまにフラれても、私は平気ですから。」

モルド・サルベリ公爵閣下……

有名な大地主の方なので、私も知っていた。
公爵閣下からしたら、女体化薬を開発してまで金稼ぎしようとする貧乏マウスバリー王国なんて鼻くそ。
TS 女王国だって総資産では敵わないかも。

—でも、公爵閣下は。

「……58 才、だった気がするんだけど。」

そう言うと、強がっていたクリスは、今度こそ悲壮な顔をした。

「それはもちろん、知ってますよ……
私より 40 も年上で、嫌に決まってるけど、仕方がないじゃないですか……！」

遂にクリスは泣きだし……私は決意した。

私がクリスを嫁に……側室だが、もらって、私の出来る範囲で、幸せにすると。
生まれた時は男性で、今は女性の私なら、クリスを誰より理解出来るはず。

マウスバリー王国に帰るよりは、モルド・サルベリ公爵に引き取られるよりは、どう転んでもマシだろうから。

23 話 少しずつ溶けていく心と距離

私はすぐ、マウスバリー王国の国王（クリスの父）宛てに、火急の使者を飛ばし、一通の手紙を届けた。

『このお見合い、お受けいたします。

クリス“王子”を、側室としてお迎えし、今日からこちらで過ごしていただきます。

以降の帰国・面会は命に関わる場合を除き不可とします。

貴国への金銭援助は行いません。

ユリス王子の王家禁書窃盗は証拠がないため不問としますが、この通達を了承しかねる場合は女体化薬の件を公表いたします。』

と、私の言葉をそのまま書いて、届けた。

返信は、なかった。

なので私は了承だと受け取った。

まあ了承しかねたところで、窃盗と女体化薬などどう転んでも向こうが悪いのだから……

「あらあらまあまあ、困りましたわ。」

リリィが頬に手を当てオロオロしている。

「事情お聞きして驚いて、わたくしも何か協力したいと思うのですが。

クリス姫に無理に話しかけたり何かしようとしても、逆効果な気がいたしまして。」

「ありがとうリリィ、無理にクリス姫に関わろうとしなくても、その気持ちだけでいいよ。
それより、側室もらうことになって……ごめんね。」

「構いませんわ、わたくしあなたに 1 番愛されている自信がありますもの。
それに、王族に嫁ぐ時点で、側室をおもらいになるのは承知しておりました。
それが不満ならそもそも嫁ぎませんわ。」

……責められるかと思っていたので、ホッと胸を撫で下ろしたのは内緒だ。

リリィは柔軟性があるって包容力で包んでくれる。
協力したいとまで言ってくれる。
それにドンシリ根を張ってくれて、側室をもらった程度でフニャフニャしない。
正室として迎えて良かったと改めて思う。

女王は……

「ああ、すまない王女、お見合いだけで断って終わりの話だと思って、引き受けたら、こんなことになって。
そもそもマウスバリー王国は元々難ありの国だと分かっていたのに。」

「気にしないで、クリス姫は私が出来る限りお世話するから。」

「クリスの性別のことだが……本家本元のウチが負けてはいられまい？
女体化薬ではないがクリスの性別を固定出来る程度の薬なら、時間をかければ将来的に作れるかもしれない。
さっそく有望な科学者を募ろうと思っている。」

まわりの協力を得ながら、クリスが楽しく過ごせるよう、心を配りながらお世話をして……

そしてクリスをお迎えして、あっという間に 2 ヶ月が経った。

最初は塞いで口数も少なかったのだが、笑顔が多く見られるようになっていた。

——そんなある日の昼。

その日は仕事と用事がなく時間があったので、クリスに TS 女王国の歴史の授業をしてあげていた。

授業が終わって、ティータイムになり……

「今日もありがとうございました、楽しかった！」

クリスが元気に言った。

最初の印象では大人しそうな感じだったが、彼女は明るく活発なお姫さまだった。
城内ではよく走っている姿を見かける……お転婆とも言えるかもしれない。

「歴史とか他の国の言葉とか教えてくれるので、大変勉強になっています。
王女さまはお仕事でお忙しいのにその合間に勉強して、私の面倒もよく見て下さって。」

「年上だし、お迎えした以上、このくらいはね。」

「あは、余裕ですね、じゃもっとお世話してもらお！
うーん、このコーヒーもとても美味しい、ただのコーヒーなのにね。
王女さまと食べたり飲んだりするものは全て美味しいです。」

そう言えば……クリスがここに来て、2 ヶ月。

クリスは基本的に女性の姿を保っていた。
今日の姿も女性で、白のブラウスとふんわりしたピンクのスカートという装いだ。
男形態は、ここに来て片手で数えるほどしか見てない。

「1 日に 1 回かそれ以上変わると聞いてたから、結構頻繁に男形態になるんだと思ってたけど……」

「あ、それ、私自身ビックリしてるんです。
王女さまにお迎えいただく前はバスの時刻表みたいにコロコロ変わっていました。
だからお見合い後の会合でも、あんな短時間の間に戻ってしまったんですね。
それがここに来てから、嘘のようにほとんど男に戻らなくなったんです。
頻度で言うと、3～5 日に 1 回って感じですかね。」

「そんな感じで自然に安定したらいいんだけどね。」

「はい、心と体って繋がってるんですね。
メンタルが安定したら女体化薬の効果も安定したようです。」

「それもあるでしょうけど、クリスとその女体化薬の相性も良かったんでしょうね。」

「あ、それは絶対あると思います。
動物実験でも、一瞬で戻る個体、コロコロ変わる個体、ずっと性別が変わったままで固定された個体も居ましたから。」

「私は何よりクリスの笑顔が多く見られて嬉しいのよ。」

「私ここに来て、毎日楽しい！
実家では物心ついた時から楽しいと思ったことあまりなかったから、嬉しい！
王女さまのおかげですよ、ありがとうございます！」

チュツ。

不意にクリスが立ったと思うと、私の頬に軽くキスを１回してきた。

「えへへ～私、部屋でメイドにメイクを教わろうかな！ やりたいことがいっぱいあるの！
それじゃ、また夕食の時、一緒にいただきましょうね！」

スカートを翻して走っていくクリスを見ながら思う……

私はクリスを助けるために、同じ TS 女性として支えたくて、彼女を側室にいただいたのだ。
色めいた関係になるのが目的ではなく……妹分を育てるつもりで。

でも……色めいた関係にならない側室って、他の国に居るのかしら。

私たちって、今後どうなるのだろう――

24 話 愛を渴望する側室姫の誘惑

その日の夜……

寝る支度を終えた私が、ベッドに入りウトウトしていると…

「こんばんは、王女さま……」

「えっ!？」

いきなり、私が居るベッドの前にクリスが立っていて、ビックリした。

私とクリスは夜に同じ部屋に居たことはない。
夜に急に来たことに戸惑いつつクリスを見る……

昼に見る快闊な姿とは違う雰囲気。
いつも頭に付けている大きな青いリボンは、夜なので外していた。
肩までの髪も下ろしている。
白のネグリジェを着ていたが、丈が短く、太ももが惜しげなく晒されている。
大きな胸に付けているピンクのブラジャーが、ネグリジェから透けて丸見えで。
薄くファンデーションと、ピンクのリップを唇に塗っている。

やだ……いつもは「女の子」「妹分」としてしか見てなかったのに。
今のクリスは「女」「そういう対象」にしか見えない……

「き、来ちゃいました。嫌ですか？ だったら戻ります。」

照れ笑いみたいな顔で言うクリス。

「い、嫌なわけは、ないけど。」

……平静を装ってるつもりだけど、きっと声が固いのがバレバレだわ。

クリスはベッドにちょこんと腰掛ける。

「夜になると色々考えちゃう時もあるって。
父はともかく、兄(ユリス)は元気かな……とか。」

「え、ええ、命に関わることでないなら面会不可ってことにしてるけど、別に完全に遮断する必要も……」

……そんなことより、私が大変なのだ。
クリスの「女全開」の姿に翻弄されている。

胸……出逢った瞬間から思ってたけど、本当大きい。
リリイには及ばないかもしれないけど、私と同じくらいかそれ以上あるんじゃない。
クリスが動くたびにプルプルして。
それに negligee から透けて見えているブラジャーがフリフリのレースで思ったより色っぽくて。
背は小さいのに体はムチムチでエッチ過ぎる。

「今夜リリイさまはお腹が痛くておひとりで休んでいるとメイドから聞いたんです。
だから来たっていうのもあります。」

ここにきた根拠を説明するクリスだが、私は動揺を抑えるのに必死。

「食べ過ぎてお腹を壊したのかと思ってメイドに聞いたら、リリイさまはセイリというものなんですって。
病気ではなく数日でおさまるものみたいで……私のメイドもみんな毎月なるって言っていました！
王女さまも、もしかしてなるんですか？セイリってなんですか？」

そう聞かれ、さすがに私は集中力を戻し、大真面目に生理を説明した。
私は女体化してから4ヶ月後に初めてなったことも教えた。

「……知らなかったってことは、クリスはなっていないってことよね？」

「はい……わ、私、生理、なりますかね？」

不安そうに私に抱きついてくるクリス。

あ、大きな柔らかい胸が、ムニュッて思いっきり……！

「私、将来的に、王女さまの子供、産みたい……だから生理ならないと困るの！」

「お、落ちついて、私が4ヶ月後になったんだから、あなたも気長に……んっ……！？」

抱き付き体勢のまま、クリスが、口にキスしてきた。

頬に軽くされたことはあったけど、口は初めて……

「私嫁いで2ヶ月経ちましたし、私は王女さまが大好きですので、もっと愛を、いただきたいです……」

クリスが、ここまで言うなんて……

この色っぽい女全開の恰好も、わざとなんだ。

この可愛くてムチムチで私に抱かれたがっている側室を抱きたいわ。

「……ねえ、さっきから王女さまの目が、私の胸を見てるの、バレバレです。」

凶星をさされ、私は「ウグッ」となる。

「谷間、気になる？ 思いっきりあるでしょう。」

クリスは見せつけるように、自分で自分の胸を持って、ムニムニして、私に差し出すようにアピール。

「ん、このデカパイ、今も現在進行形で大きくなってますよ。

私はあの試作品女体化薬と、よほど相性がいいようです。

数日前に新しいサイズに買い換えました……Fカップ、です♡」

「……！」

思わず私はもうお股を押さえ、前かがみ体勢になる。

「やだ、王女さまったら、男性だった時はチンチンフル勃起になってるんでしょうけど、そこにはもう何もありませんよ？」

なんだかんだで男性だった時のとっさの癖とか特徴はまだ抜けてないんだなって見ていて分かります。」

……確かに勃つものはないので勃起はしないが、割れ目はもうドロドロになっている。

「私はもっとひどいですよ。

気が付くと足をガバーと開いて、スカートからパンツ丸見えになっていたり。

ブラジャーを付けるのを忘れて外に出てしまっ、血相変えた私のメイドが飛んできたり。」

……そんな TS 娘あるある、今はどうでもいい……

「私、女性で正室のリリィさまにはかなわないと思ってます。

でも元々男性だった者同士、あなたの本当の意味での 1 番の理解者にはなれるはずなんです。

ね……抱き締めて……したいことして……私にも愛を……」

ここまで言わせてしまったら、もう……

私はクリスのネグリジェを脱がしながら、ベッドに押し倒した。

25 話 愛しい少女を食る

「やっとうしてくれましたね。

ああ……あったかい、王女さまのぬくもりと柔らかさに、直接触れたかったの。」

クリスが嬉しそうにそう言い、私の背中に腕をまわしてくる。

私もその小さな体をギュと抱き締める。

「それに王女さま、とってもいい匂い！

あ、私たちの胸同士が当たって潰れてフニフニしてる……」

胸から胸に鼓動が伝わり合って、それが心地良くて、ずっとこうしていたいと思うけど……

私はクリスが付けているピンクのレースのブラジャーを外す。

F カップの大きな胸と綺麗な乳首が、弾むように姿を現した。

それを見た私は、その胸を触りながら、食べるように舐め始めた。

「グチュ、プチュ、グチュ、ジュル、チュっ、グチュ、ジュル、プチュツ。」

「やん、王女さま、そんなむしゃぶって！」

「ジュル、こんな美味しそうなデカパイが目の前にあったら、チュ、仕方ないでしょ。」

マンコのヌルヌルが増えてどうしようもないので、脱ぎたい……

まず私は、脱げかけていた自分のネグリジェを脱いで、ブラジャーを外し、パンティもおろした。

そしてクリスのピンクのパンティをそっとおろす。

「やん、恥ずかしい。」

「うふふ、お姫さま、まだ毛が生えてないのね？」

クリスの毛が生えていない、小さくてピッタリ閉じてプックリした縦筋を、ツンツンする。
もう処女丸出して感じて、これが私のモノになると思うとゾクゾクする。

私は、クリスの割れ目に指をさし入れてみると……

ピチャ……

「あん……」

クリスのマンコは、シットリとか通り越して、濡れてベトベトになっている。

「もうヌレヌレじゃないの。」

「うん、割れ目がどんどん熱くなってること、自分でも気付いてたの。
そういう王女さまだって、オマンコ……」

ピチャ……

クリスが負けじと、私のマンコに指を這わせてくる。

「うふ、王女さまだって濡れてる……」

「もう、そんなこと言うなら、こうよ！」

私はクリスのオマンコを指で開く。

ネチャツという音と共に、ピンクのマンコ肉が愛液と共に現れた。

「や、恥ずかしい……きゃっ。」

ジュル……

私はそこに舌を這わせ、下から上に舐め上げる。

「んん……美味しいわ、チュ、クリスのメスマンコ。」

「きゃ、駄目、あつ、あつ。」

「ジュル、ジュル、チュ、チュル、ジュジュー！」

「やあん、吸わないでえ。」

「そう言われてもこのマンコ、舐めろと言わんばかりにどんどん愛液垂らすんだもの、ジュル、んん、甘くて美味しい、ジュッ！」

「あん、あはぁあん。」

「んっ……」

顔を離れた私は、とりあえず小休止で、クリスのオッパイ揉みながら、口にキスした。
クリスも呼応するように、私のオッパイモミモミしながら、唇を深く重ね合わせてくる。

しばらくその感触とキスを味わっていたが……

「セックスして、早く。王女さまにオマンコ舐められて、余計ここからのヌルヌルが止まらないの！」

切羽詰まったように言うクリス。

「あなた、女性同士のセックス、どうやってするか分かってるの？」

「うん、ちゃんと分かって言ってるわ。
女同士でオマンコとオマンコをピトッて重ねて、こするんでしょ。」

「分かってるなら、遠慮する必要はないわね！」

ピチャ……

私はクリスの足を開かせ、自分は押し乗って、マンコにマンコを重ねる。

「ああん。」

「やあん。」

その熱さに同時に声を出してしまう。

「王女さま……オマンコ熱い……動いたらどうなっちゃうの……」

「ではやってみるわね。」

ズリ、ズリ、ズリ、ズリ！

私はクリスを押さえつけて、マンコでマンコをこすった。

「や、きゃん、オマンコ、熱い！」

「ん、ん、ふ、はあ、はあ、はあ、あ、あ、あ、ん、ん、ん！」

私は鼻息が出そうなくらい、マンコにマンコを連続でこすりつける。

「やん、王女様ったら、あん、いきなり激しい！」

「ん、クリスがそんなに可愛くて、私を興奮させるのが悪いのよ！」

「生まれた時は男だった 2 人が、今は女になって、オマンコこすり合わせてるなんて！」

ああ、本当それ。

特に女になることを希望していなかった 2 人が。

私は女王に女体化魔法をかけられて、クリスは無理やり女体化薬を飲まされて。

でも私はこうなったことを今は全く嫌がってないし、女性を謳歌している。

クリスも飲まされた時は嫌だっただろうけど、今は女性として楽しくしている。

そんな 2 人が女性になったあとに出逢って、女性同士で愛し合ってる。

「んああ、ビリビリするう！マンコ気持ち良くなって、電流が走ってるみたい！」

私は快感で叫んだ。

「クリスの腰を両手で掴んで、割れ目叩き付けるからね！」

私はクリスが逃げられないように両手で押さえつけて……

ズリ、ズリ、ズリ、ズリ、ズリ！

「ああ、あっ、あっ、あっ、あん！」

「ん、ん！最後に思いっきりひとこすりして、一緒にイクわよ！」

「うん！イかせて！私も一緒に動くね！あっ、あっ！」

ブシャツ……！

「ああああああ！！」

「イクうううう！！」

私たちは一緒にイって、盛大に潮を吹いた。

「あのね、私っ……」

汗と愛液にまみれたクリスが一生懸命抱き付いてくる。

「私王女さまが大好き……！」

「ええ、私もよ、可愛いクリス、ずっと大事にするから……」

私もきつく抱き締め返し、熱いキスをした。

26 話 幸せな結婚

私は起き上がって、座った。

「クリス、膝の上にどうぞ。」

「うん。」

クリスを膝の上に座らせ、向かい合う形で、密着して抱き合って、キスする。

「ん……クリス軽いから、抱っこしやすいわ。」

「えへへ、でも恥ずかしいな、私の割れ目が王女さまの太ももに直接付いてしまって……」

「うふ、なんだかまたネットネトしてきてない？」

「う、うん、オッパイ同士が当たって、私また興奮してる……もう1回オマンコでオマンコこすってくださいませんか？」

「いきなり再戦をご所望なんてエッチな側室ねえ、もちろん受けて……」

受けて立つと言おうとしたけど、最後まで言えなかった。

クリスがサッと私の膝からおりて、背を向けてしまったのだ。

そして彼女は肩で息をしていた。

このタイミングで急に普通の体調不良になるとは思えないので、私は察した。

「……もしかして、男に戻りそう？」

「は、はい、残念ながら……ううう、ごめんなさい……」

そう言っているクリスの声は、トーンがひとつ低くなっている。

肩より長い髪が、肩より上の短い髪になり……

「ううう……せっかく愛してもらっていたのに……」

そう言ってクリスは泣いている。

私は肩を軽く掴んで、こちらを向かせた。

クリスは、引っ込んでまな板になった胸を両手で隠し、涙ぐんでこちらを見ていた。

「す、すみません……」

「変わるタイミングは自分で決めれないんだから仕方ないじゃない。何を不幸そうに泣いてるのよ。」

「これが不幸じゃないならなんなんですか。せっかく勇気を出してお部屋を訪れて、初めて抱いていただいて、さぁもう1度って時に……今夜は撤退します、さよなら……」

気まずそうに、床に落ちたままだったネグリジェに手を伸ばすクリス。

「クリス、どうして逃げるの、命令よ、ここに居なさい！」

私はちょっとイライラして、鋭く命じた。

「でも、あなたは女性しかそういう対象として見れないんでしょう。

女性の私なら胸も大きいし多少可愛いかもしれないけど、元の私はこんな見苦しい女装男なんです。あなたの視界に入るのがいたたまれなくて……んっ。」

ウダウダうるさいクリスの口を、口で塞いだ。

「ん……」

大人しくなったのを見てから、口を離す。

「こ……このキスに何の意味があるんですか？」

「意味しかないわよ。クリスの事情を知って側室にいただいたんだから、男に戻ったからって嫌がるわけないのに。」

「ほ、本当に、今の私でもよろしいのですか？」

まだ不安そうなクリスの頭を撫でる。

「よろしくってよ。さあ、もう1度ベッドに寝て……」

「はい……」

クリスを仰向けにさせて、体を撫でる。

肌スベスベで、乳首もピンクでピンとなっていて、可愛い。

続けて、可愛いチンチンをそっと触って、動かす。
それは私の手が動くたびに、芯が入ったようになっていく。

「あ……」

「クリスのチンチン、こうやって触るだけで、ピーンってなってくる。敏感なんだから、このこの。」

このチンチン、舐めてみたい。

私は思わず、顔を近付け、それを口に含んだ。

「チュッ、んっ……れろっ……ちゅっ、ちゅぱっ……んれろっ……」

唇をすぼめて亀頭にキスしたり、軽く舐めたりしてみた。

「やっ、気持ちいい、溶けるようですっ……」

「あら、じゃ溶かしてあげようじゃないの。んれろお……ん……ちゅっ、ちゅっ、んん……」

私は亀頭の裏側を舐めて攻めてあげた。

「んちゅっ、ちゅばっ、ちゅっ、れろお、ちゅばっ、ちゅ、ちゅばっ……」

「王女さま、うぁ……はぁ……はぁ、もう駄目、出そうなのぉ。」

「こら、少しは我慢しなさい。」

私は水道の蛇口を閉じるように、チンチンの根元を手で塞ぐように握る。

「ああ、だめええ。」

そして舐めるのを再開。

「ん、ん、んう、ふっ、ぐ、んん……」

ジュツ、ジュツ、ジュツ、ジュツ…

水気たっぷりのエッチな音をさせて舐める。

「うっ、あぁっ、ううっ、はぁっ……」

「じゃイってもいいわよ、ん、ん、ジュル、ジュル、んんん～～！」

「や、出ちゃう、王女さま離れて、口に出しちゃう、あ、あぁあっ！」

ビュツ……！

「んふうう……」

私は喉の奥に熱い飛沫を感じる。

そう言えばフェラ経験はこれが初めてってことになるわね。

「ぐっ……んぐっ……ごくっ……んぐっ！ ごく、ごく……」

せっかくなので私は、口の中の精子を飲んだ。

「はあ、はあ、はあ……わ、うわああ、出しちゃった！」

「ん、ごく、ごくっ……ン……ふはあ！」

精子を飲み終え、私はチンチンから口を離した。

「す、すみません、飲ませちゃった！」

「いいのよ、可愛い側室のなもの。」

「王女さま、嬉しいです……」

甘えるように頭を寄せてきて、目を閉じるクリス。

……んんん？ 寝の態勢に入っていないか？

「ちょっとあなた、今から寝ようとしてるの、それは？」

「え、駄目？」

「駄目に決まってるでしょ、これを見なさい！」

私は自分だけ体を起こし、クリスの上に跨り、割れ目を指で開き、クリスのせいでヌレヌレになっているマンコを見せつけた。

「わあ……とても素敵です……愛液が垂れてきそう……やん、チンチンムズムズしちゃう。」

見ると、さっき出したばかりなのに、クリスのチンチンはピーンとなっていた。
もう、未熟なくせに興奮するのは早いんだから。

「もしかして、王女さまの中に入ってもいいのですか？」

「ええ、でも私のペースでしたいから、あなたはジッとしてなさい。」

最初女体化してその場で女王のふたなり魔法ペニスで強引にされたので、私は非処女だ。
でもそれ 1 回きりで不慣れなことは間違いないので、私のペースでなければ。

私はソロソロと、クリスのチンチンの上に、腰を下ろす……

これはいわゆる騎乗位というやつかしら。

チュプ……

「んんん！」

「んあ！」

マンコにチンチンが入り、私たちは同時に声を上げた。

「あは、自分から挿れちゃった。」

「あ、王女さま、オマンコ痛くないですか？」

……良かった、ちょっと心配だったけど、別に痛くないし、余裕すらある。
最初に女王に非処女にしておいてもらって良かったかも。

「ええ、大丈夫よ、動いてみるわね。」

私は腰を少し浮かし……

パチュ！

水音と共に降りる。
また腰を浮かし……

ブチュ！

「あ！」

「んんん！」

ズチュ！

「んはああ！」

「あああん！」

パチュ！パチュ！パチュ！パチュ！パチュ！パチュ！

「やん、気持ちいい！」

私はたまたず、杭打ちのように腰を上下する。

「あ、あ、あん、ああ、あ、あ！」

「んああ、王女さま、もう出ちゃう！私イク！いっちゃうよおお！」

「いいわよ、出しなさい、イキなさい！それ！」

ビュクツ……！

ブシャツ……！

「んはああ～～～！！」

「ああああああ！！」

私たちは愛液と精液を交わせながら、絶頂した……

それから1週間後の昼……

私はその日は時間があつたので、クリスに他国の言葉を教えてあげていた。
私も全然だけど、クリスに教える程度には、なんとか出来るので。



それが一息ついた時、ソファに座ってしばし歓談。
私が何の気なしにクリスの手に触れると、クリスは少しはにかんで、内側から握り返してきた。

今日のクリスは、元の性別である男性だった。
なんだろう、あの夜以来、ちょっと“こっちのクリス”も自己主張してないか？

「……私は王女さまみたいに「私は女性！」って感じじゃないので、どっちつかずなんですよね。
でも男で居る時は楽なんです、そして女性で居る時は楽しくて……！」

「大いに迷えばいいじゃないの。私に遠慮して女性で居なきゃって力まなくていいのよ。
私はどちらのあなたも好きで、魅力的だと思ってるんだから。」

「えへへ、うん……ねえ、王女さま、この恰好、変じゃないかな？
ずっとスカートばかりだったから、落ちつかなくてソワソワする。」

そして今日は、クリスに似合いそうなスーツを用意して、着てみてもらっていた。
水色の長袖上着、青いネクタイ、スラックス、革靴という普通の男性スタイル。
本人は不安そうだが、これが意外と似合っている。

「女の子のあなたも可愛いけど、そういう装いをしたあなたも全然変じゃないし、いいわよ。」

「嬉しい……あのね……」

クリスは軽く頬にチュッとキスしてきた。

「……そこは口じゃないの？」

「なんだか恥ずかしくて。」

「結婚してるのに今更恥ずかしいも何もないでしょう。
女の子のあなただったら抱き付いてオッパイ押し付けながらムチュツって口にしてくれるのに。」

「押し付けるものがないからなあ……」

ふむ、やっぱり男の時は媚びてはこないってわけね。
これは抱きついてムチューツてしてくる程度には教育しないと。

「あ、あのね……」

「ん？ 今度は何？」

「私……幸せです。こんな幸せな結婚が出来たから。
兄が窃盗して父に飲まされた女体化薬だけど、飲まされて本当に良かった！」

クリスは嬉し涙を浮かべて言った。

やれやれ、あのチンケでみっともない泥棒王子と馬鹿でしようもない暴言王も、結果的にはクリスの役に立ったじゃないの。

27 話 バースデーゴリラ

それから1ヶ月後……

私は王女の仕事と勉強など、日々忙しくも充実した毎日を送っていた……

「ぎゃ————！！！！」

そんなある日の早朝の、私の寝室。
懐かしい“男時代の私の声”が響き渡った。

私が叫ぶのも無理はないだろう。
朝起きたら自分の手が黒くて筋張った大きな手になってて、足も胸もお腹も筋肉でパンパン。
絶望に狂いそうになりながら鏡を見ると、ゴリラみたいなゴツイ男が居た。
他の誰でもない、女体化する前の自分だ。

バン！

おなじみの「NO ノックドア開け放ち」でリリイ登場。

これは女王だけの専売特許だと思っていたが、リリイとクリスもするようになった。
つまり、私にプライバシーは完全にはない。

「どうされました……って、きゃっ！誰！？王女さまは！？」

「え、えっと、私、王女……」

低い声でモゾモゾ言う私。

「それは王女さまのネグリジェ！なんで着てるの！気持ち悪い！変態！不法侵入！王女さま、どこ！？」

「リリイ〜〜〜私が王女〜〜〜信じて〜〜〜」

「おいおい何の騒ぎだ！」

女王も現れた。

「……ティルバート。」

「え、ティルバートって、王女さまの元々の……！？」

「う、ううう～……」

私は、ゴツイ体を丸めて泣くしかない。

最悪の誕生日プレゼント。

何もよりによって今日、元に戻らなくてもいいだろうに。

そう、今日は私の 21 才の誕生日なのだ……

「ティルバート、そんなに泣くな。」

「う、ううう、これが泣かずに居られるわけないでしょ……もう駄目よおしまいよ……」

「まずそのネグリジェを脱ごうか。」

サイズが違い過ぎて腹掛けみたいになってるし、ゴリラ×女物ネグリジェは、気持ち悪さと常識を限界突破したグロテスク超絶兵器だ。それならまだ裸のほうがマシというもの。」

私はやけくそで肌に張り付いているようになっているネグリジェを引きちぎった。

「ひどいわお母さま！せっかく女性として頑張ってきたのに！

誕生日を迎えてこれからもっと楽しい王女人生になると思ってワクワクしてたのに！

今更男に逆戻りなんて、あんまりじゃない！」

「悲劇のヒーローになってるところ悪いが、それは今日 1 日だけの現象だ。」

「……え？」

この国から、下手したらこの世から消えることを考えていた私は、顔を上げた。

「言い忘れていて済まなかったな。」

女体化魔法で TS 女性になったら、1 年に 1 度だけ、元の性別に戻る日があるのだ。

これは体内調整のようなもので、お前がこれからも女性で居るためには必要不可欠で、受け入れるしかない。

明日の 0 時をまわると同時に、また女性に戻る。」

その言葉で、私の体は安堵で力が抜ける—

「ほ、本当ね？これは今日 1 日だけね？」

「ああ、だからもう泣くな。」

「……ひどいなあ、それならなんで言ってくれてなかったの……」

恨みがましく、私は女王を見る。

「いや～それが何月何日なのかは、分からなかったものでな。」

普通に考えて、女体化した日だと思ってた。

だからもう少し先だと思っていて……本人の誕生日だとはな。」

「は、はじめまして、ティルバートさん……で、いいんでしょうか？」

リリイがおずおずと言った。

この姿で会って話すのは初めてなので「初めまして」で間違いない。

「は、はじめまして……リリイ……」

リリイには見られなくなかった、この姿……

幻滅した？なんて、冗談でも聞けない、恐ろし過ぎて……

.....

1 時間後……

私はメイドに買ってきてもらった無地の半そでTシャツとゆったりした長ズボンに着替え、椅子に座ってボーッとしている。

こういう男物ファッション、2 度とすることはないと思っていたのに……

机にはたくさんの誕生日プレゼント。

女王はオーダーメイドのドレス、リリィはネックレス、クリスは髪飾りをプレゼントしてくれていた。

今日は部屋でひとりで過ごすとした。

女王は「外に遊びに行ってもいいぞ？ ティルバートは今日 1 日だけ旅から帰ってきたということにすればいいだろう」と言った。

でも私は、やめておいた。

いきなりだったこともあり、そんな元気がないのだ。

両親は亡くなってるし、ひとりっこだからきょうだいは居ないし……

会いたい家族(女王、リリィ、クリス)はお城の中にしか居ないので。

勇者時代のギルド仲間や知り合いだって、いきなりアポなし訪問して「俺だよ俺、俺俺。今日遊ばない？」って言ったって、急に都合つかないだろうし。

こうして何もせずボーッと過ごし、昼食をいただき、昼寝して、夕食をいただき、お風呂に入り……

夜、日付が変わって、0 時。

「ふう……」

特に痛みもなく、音もなく、いきなりシューンと萎むように、地味に、女性に戻った。

鏡でも目視確認して、安心する。

ネグリジエに着替え、布団に入りながら、考える。

私の寿命を、仮に 80 才くらいと仮定すると……

私の人生であと 60 日、男に戻る日があるのか。

まあ、ひとりで人生を考えながら休む日、ということにすればいいのかもしれないけど。

……はっ！

私はふと思った。

最初の数年はいいだろうけど、5 年目くらいから、おかしいと思われるよなあ。

TS したことも含め、この秘密を知ってるのは人数で言うと 30 人くらいで、国民は知らないのだから。

「あの王女は誕生日は必ず引きこもる」みたいに噂が流れたりして……

誕生日当日にインタビューしたいとか言われても、断るしかないし……

まあ来年以降のことを今考えても仕方ないか。

私は目を閉じて、眠りに落ちた……

28 話 私の元に還ってきた女体化薬

誕生日の翌朝……

私はルンルンと、メイクをしていた。

午前は、魔法の講師が来る。

私は魔法の才能が少々あったらしく、かすり傷を治せる程度の回復魔法を使えるようになっていた。

今は火の魔法の中で一番初歩的なものを練習中。

来年の誕生日までには例の『ペニスに帰ってきてもらう魔法』も自分で使えるようになってるかも、うふふ！

そして午後は、パーティで知り合った他国の王女さま方に、お茶会にお呼ばれしているのだ。

リリとクリスも連れて行って「ウチの嫁たちです☆」って紹介しちゃうと思ってる。

バン！

おなじみの「NO ノックドア開け放ち」で女王登場。

「何よお母さま、朝の私はメイクで忙しいの。

最近つけまつ毛にハマったんだけど、貼るのが難しくて……」

「マウスバリー王国の、ユリス・マウスバリー国王殿下が、面会を申し込んできている。」

「え……」

私は貼ろうとしていたつけまつ毛を、机に置いた。

「命に関わることで面会しないと通達して、向こうは返信しない形です承したはずだけど？

そもそもユリス国王殿下じゃなくて、ユリス王子殿下でしょ？」

「一応“命に関わること”があった。

あちらの国王（ユリスとクリスの父）が亡くなり、ユリス殿下が緊急即位されたのでな。」

……亡くなったのか、あちらの国王。

クリスに暴言を吐いて女体化薬を飲ませるなど、いい印象はなかったので、特に哀惜の情はないけど。

「面会を申し込むのはユリス殿下の自由だが、引き受けるかどうかはお前の自由だ、どうする？」

人ひとり亡くなってるのに『いいえ』でシャットアウトはあんまりだろう。

何より、クリスがずっと兄を気にしていたのも知っている。

私は面会を引き受けた。

——1 時間後。

私はクリスと一緒に、迎賓室で、ユリス殿下を出迎えていた。

クリスとのお見合いの日以降なので、会うのは 3 ヶ月ぶり……

「兄上……！」

クリスが飛び出して、ユリスに抱き付いた。

「クリス……ごめんな、不甲斐ない兄で……幸せかい……？」

ユリスはギュッとクリスを抱き締め返し、涙ぐんだ。

「ええ、すごく幸せよ！ 側室とは思えないくらいとても大事にしてもらっているの！

女体化薬も定着してるのか、性別が変わる時も全然苦しくないし！

変わる前になんか分かるようになったから、事前に部屋に籠るとか対策も出来るの！ それからそれから！」

クリスが一生懸命話し、ユリスはうんうんと頷いていた。

一通りの近況を終えると、ユリスは窃盗の件について深々と頭を下げ謝罪してきた。

そして、前国王の死と、自身の即位を報告した。



「……父には悪いけど“命に関わること”で間違いないので、面会を申し込む口実になると思って……
今日……面会を受けていただけて良かったです……」

そう言いながらユリスが両手で大事そうに持っている、瓶に入った、水色の、透き通るような液体……

「あっ！」

それを見たクリスが大きく反応した。

《王女化転生：プリンセス・リジェネレーション》を記した TS 王家禁書から作られてしまった試作品女体化薬の、保管されていたふたつ……

ふたつあったうちのひとつは、亡くなった前国王が、クリスに飲ませた。

あとのひとつがどうなったのかは、知る由もなかったが……

「この世に残った最後のひとつの、女体化薬です……

本来の持ち主である、ティアリーノ殿下に、お還しいたします……」

……私は両手をお皿のようにして、自分の胸の前に出した。

そしてそれは、私の手のひらに、そっと置かれた……

我が王家の禁書から生まれてしまったもの。

ならば還るべき場所は、TS 王家の王女……つまり私の手の中に。

この世に在ってはならないものをどうするのかは、私に委ねられた。

29 話(最終話) 用済み勇者だったくせに、幸せになるなんて！

私が女体化して、王女になり、今日でちょうど 1 年の節目を迎えていた……

「ティアリーノ王女、正室リリィ、側室クリス。仲良くやっているようで何よりだ。」

私たち 3 人は、女王に呼ばれ、中庭に居た。

「娘よ……魔王が急に倒され、用済みになったお前を女体化させて、養子縁組して、王女になってもらい、今日で 1 年か。」

「そうね、まるで昨日のここのようだけど……」

「最初はどうなることやらと思っていたんだ。

なんせお前は打倒魔王と自分を鍛えることしか考えていなかった脳筋勇者だったからな。」

「あはは、自分が生まれた時は男だったなんて、嘘みたい。

今では、これが私！って感じで、女であることを自覚して、満足してるの。」

「勉強熱心で、女としての振る舞いも覚え、気品まで備えるようになって、押しも押されぬ立派な王女になってくれた。」

頭を撫でられ、私は自然と涙が滲む。

「ありがとう、お母さま！私を女体化してくれて、感謝しています！」

「こちらこそ本当にありがとう！

最初の時のことを思い出すと、まさか感謝されることになるとは、思ってもいなかった。

これで、私も安心して引退出来るな？」

見た目が 20 代で若いからついつい忘れてしまうけど、女王はもう 51 才だ。

でも……

「さすがに引退を考えるのは早くない？ 50 代ってまだまだ現役でしょ。」

「そうかな？ まあしばらくは現状維持でいくとしようか。

リリィ、クリス、私の娘を右と左でこれからも仲良く支えてやってくれ。」

「もちろんですわ！」

「お任せ下さい、女王さま！」

「さあ、固い挨拶はこれで終わりにして、アフタヌーンティーを楽しもう！」



私たちは、用意してくれていた豪華なお菓子と紅茶を乗せたテーブルにつく。

「私たち、アフタヌーンティー好きねえ……」

私はリリイとクリスに、結婚前にこうしてティータイムでおもてなしたことを思い出す。
リリイの時は好かれたくて必死だったけど、クリスの時は何も考えずただ時間を過ごすために……
出逢った時の思い出は全く違うが、今は2人を同じ熱量で愛している。

「このスコーン、美味しいですわ！」

「お茶とお菓子はナンボあってもいいものですね。」

楽しそうに笑っているリイとクリスを見ていると、女王がコソッと耳打ちしてきた。

「ところで、側室は 5 人くらいまでなら娶ってもいいんだぞ？」

「え！？」

こんな話をリイとクリスに聞かれたら大変だ。
私は女王の腕を引っ張って、少し離れた場所に避難。

「……いきなり爆弾発言をしないで！」

「将来的に万一、という意味だったんだが、余計なお世話だったようだな。」

—そう、これ以上は、必要ない。

希望すれば私はいくらでも「百合ハーレム」を作れる立場ではある。
むしろ何人もの美女をはべらせてこそ、立派な百合王女と言えるのではないだろうか。

でも、「私のハーレム」はリイとクリスだけでいい。
2 人を愛し、愛され、私はもう満足しているのだから。

しかし、私はまだ 21 才。
これから長い王女としての人生、やがて女王となる未来が続いていく。
波乱や試練はいくらでもあるだろう。

そして私の部屋の、机の中の嚴重に鍵をかけた引き出しには、この世に残る最後のひとつの「女体化薬」
が、静かに在る……

—さあ、私の TS 王女人生、本格始動ね！

*** END ***